

# ヒケシマ遺跡

大野城市文化財調査報告書

— 第 67 集 —

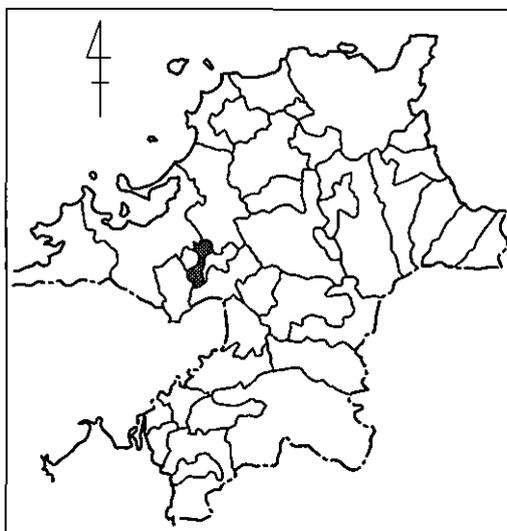
2005

大野城市教育委員会

# ヒケシマ遺跡

大野城市文化財調査報告書

— 第 67 集 —



2005

大野城市教育委員会

# 序

大野城市は福岡平野の一角にあり、特別史跡大野城跡、特別史跡水城跡そして牛頸窯跡群などがあり、文化財に恵まれた街です。今回ご報告するヒケシマ遺跡は、市名の由来ともなっている国の特別史跡大野城跡がある四王寺山麓から御笠川までゆるやかに下る平地に営まれた遺跡です。弥生時代前期の小壺の副葬された墓地として著名な中・寺尾遺跡に近接していて、ここも弥生時代の遺跡として知られていました。

発掘調査は昭和59年度と平成元年度に行いましたが、種々の事情によりだいぶ年月を経た報告になってしまいました。本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、地域の歴史の解明に役立ち、また、活用されることになることを願っております。

最後に、発掘調査にご協力いただいた地権者をはじめとして関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成 17 年 3 月 31 日

大野城市教育委員会  
教育長 古 賀 宮 太

## 例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が昭和59年度と平成元年度に実施したヒケシマ遺跡の発掘調査報告書である。
2. ヒケシマ遺跡は民間開発に伴って発掘調査を行ったものである。
3. 遺物写真は、甕棺を除いては岡紀久夫の撮影による。
4. 遺物実測並びに製図・観察表作成は(株)埋蔵文化財サポートシステムが行い、舟山良一が検査した。また、遺構製図は渡部美香が担当した。
5. 本書中で出土遺物量をビニール袋何袋と表現する時の袋の大きさは縦38cm、横26cmである。また、整理箱何箱と表現する時の箱の大きさは内法で40×61cm、深さ15cmである。
6. 本書の執筆・編集は舟山良一が担当した。
7. 本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の2.5万分の1地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。

# 本文目次

I. はじめに .....	1
II. 位置と環境 .....	2
III. 調査の結果 .....	5
1. 調査概要 .....	5
2. 遺構と遺物 .....	6
(1) I次調査 .....	6
i. 土坑 .....	6
ii. 溝状遺構 .....	14
iii. 甕棺墓 .....	18
iv. ピット出土遺物 .....	18
(2) II次調査 .....	19
i. 竪穴住居跡 .....	20
ii. 土坑 .....	21
iii. 甕棺墓 .....	24
IV. まとめ .....	25

# 表目次

I次調査出土遺物観察表 .....	27
II次調査出土遺物観察表 .....	30

# 図版目次

- 図版 1 (1) I次調査地全景  
(2) I次.SK 01・02
- 図版 2 (1) I次.SK 03  
(2) I次.SK 04
- 図版 3 (1) I次.SK 06  
(2) I次.SK 10
- 図版 4 (1) I次.SX 02  
(2) I次.SX 03～06
- 図版 5 (1) I次.SX 03～06  
(2) I次.K 1
- 図版 6 (1) II次調査地全景  
(2) II次調査地全景
- 図版 7 (1) II次.SK 01  
(2) II次.SK 01
- 図版 8 (1) II次.SK 220  
(2) II次.SK 220
- 図版 9 (1) II次.1号竪穴住居跡  
(2) II次.K 2
- 図版 10 出土遺物①
- 図版 11 出土遺物②
- 図版 12 出土遺物③
- 図版 13 出土遺物④
- 図版 14 出土遺物⑤
- 図版 15 出土遺物⑥

# 挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡分布図 (1/25000) .....	3
第 2 図	ヒケシマ遺跡位置図 (1/5000) .....	4
第 3 図	I 次調査遺構配置図 (1/100) .....	5
第 4 図	I 次.S K 01・02 実測図 (1/20) .....	6
第 5 図	I 次.S K 03 実測図 (1/20) .....	7
第 6 図	I 次.S K 06 実測図 (1/20) .....	8
第 7 図	I 次.S K 08・09 実測図 (1/20) .....	9
第 8 図	I 次.土坑 (S K 01～09) 出土土器実測図 (1/4) .....	11
第 9 図	I 次.S K 11 実測図 (1/20) .....	12
第 10 図	I 次.土坑 (S K 10～11) 出土土器実測図 (1/4) .....	13
第 11 図	I 次.S X 02 実測図 (1/20) .....	14
第 12 図	I 次.S X 03～07・09 実測図 (1/40) .....	折込
第 13 図	I 次.S X 03・05 実測図 (1/20) .....	15
第 14 図	I 次.土坑 (S X 02～09) 出土土器実測図 (1/4) .....	16
第 15 図	I 次.S D 01～02 出土土器実測図 (1/4) .....	17
第 16 図	I 次.ピット出土土器実測図 (1/4) .....	17
第 17 図	I 次.K 1 実測図 (1/20) .....	18
第 18 図	I 次.甕棺 (K 1) 実測図 (1/8) .....	19
第 19 図	I 次.石器・土製品実測図 (1/2) .....	20
第 20 図	Ⅱ次調査遺構配置図 (1/100) .....	折込
第 21 図	Ⅱ次.1号竪穴住居跡 (1/60) .....	21
第 22 図	Ⅱ次.S K 01・K 2 実測図 (1/20) .....	22
第 23 図	Ⅱ次.土坑出土土器実測図① (1/4) .....	23
第 24 図	Ⅱ次.土坑出土土器実測図② (1/4) .....	23
第 25 図	Ⅱ次.土坑出土土器実測図③ (1/3) .....	24
第 26 図	Ⅱ次.甕棺 (K 2) 実測図 (1/8) .....	24
第 27 図	Ⅱ次.石器・土製品実測図 (1/2) .....	25
第 28 図	I・Ⅱ次調査遺構配置図 (1/200) .....	折込

# I . はじめに

ヒケシマ遺跡は1980年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』に190120番として登録されている遺跡で、現在の行政区画では大野城市御笠川4丁目と川久保1丁目に当たる場所に所在する。

本遺跡は、県道水城下白井線の工事が行われた昭和42年頃から甕棺墓地として知られるようになった。土地所有者によれば、昔は畑を馬で耕す時など時々馬が甕棺墓の中に足を突っ込んで困ったとのことである。しかし、本格的な発掘調査は昭和59年以後のことである。開発に伴って大野城市教育委員会が2度実施したが、Ⅰ次調査は1984年（昭和59年）4～5月、Ⅱ次調査は平成元年（1989年）12月～翌1990年（平成2年）2月である。また、整理作業は他の事業や予算の関係から2003年（平成15年）と2004年（平成16年）に行い、報告書の刊行は2004年度になった。調査結果については後述するが、弥生時代の土坑や甕棺墓が検出された。

それぞれの調査体制は以下のとおりである。

(Ⅰ次調査時、昭和59年度)	教育長	二宮 親卯
	教育部長	村上 信幸
	社会教育課長	船越 美直
	同 係長	赤星 健彦
	同 主査	高橋 裕司
	同 技師	舟山 良一 (調査担当)
	同 技師	向 直也
	同 嘱託	秀嶋 和子
(Ⅱ次調査時、平成元年度)	教育長	久野 英彦
	教育部長	池田 嘉門
	社会教育課長	船越 美直
	同 係長	青木 克正
	同 主査	高橋 裕司
	同 技師	舟山 良一
	同 技師	向 直也 (調査担当)
	同 技師	徳本 洋一
(報告書刊行時、平成16年度)	教育長	古賀 宮太
	教育部長	鬼塚 春光

社会教育課長	秋吉 正一
同 係長	舟山 良一
同 主査	徳本 洋一
同 主査	緒方 一幹
同 主査	石木 秀啓
同 主査	丸尾 博恵
同 技師	林 潤也
同 技師	早瀬 賢
同 嘱託	西堂 将夫
同 嘱託	一瀬 智
同 嘱託	井上 愛子
同 嘱託	北川 貴洋
同 嘱託	粟津 剛史

## Ⅱ. 位置と環境

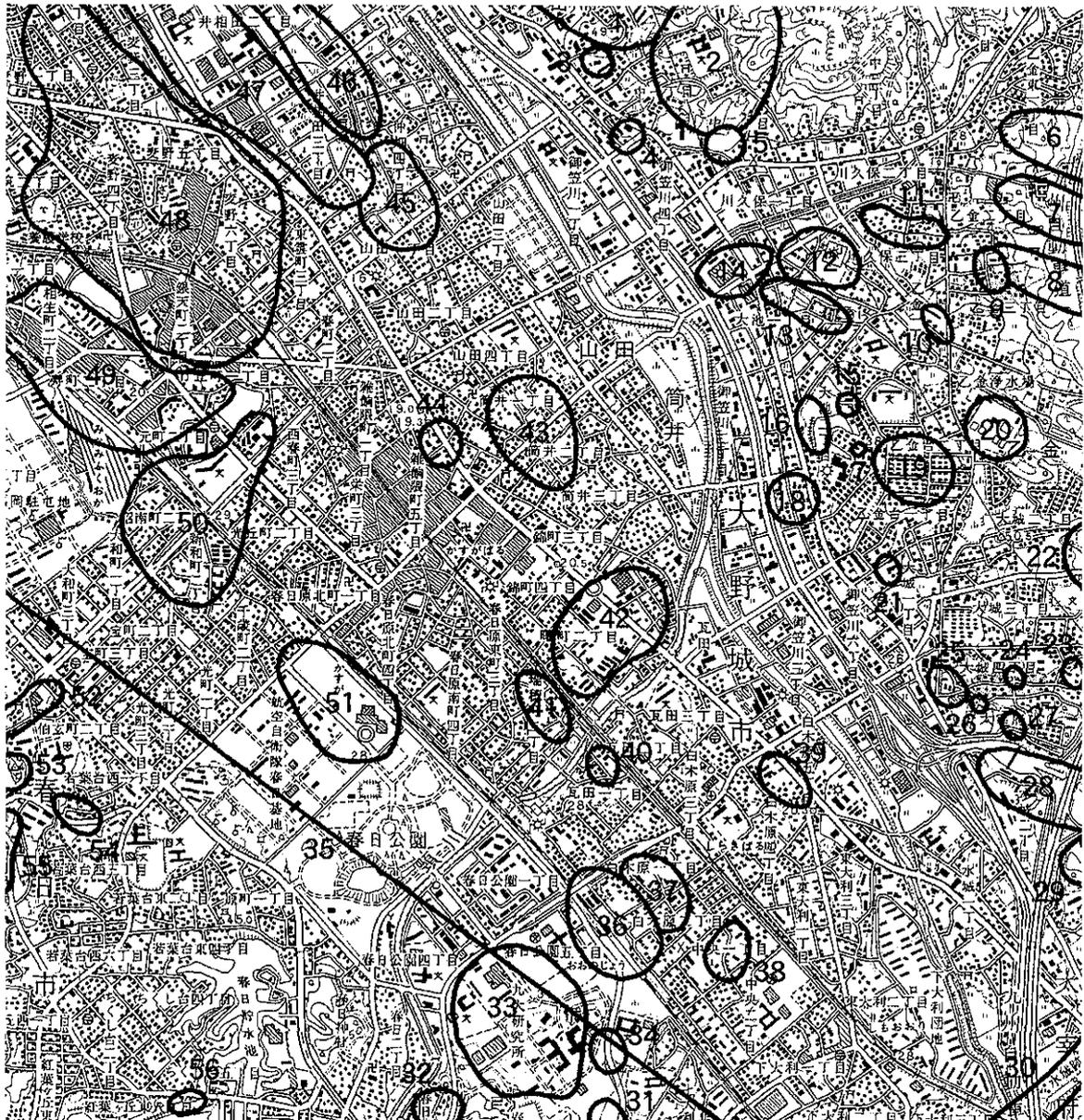
ヒケシマ遺跡が所在する場所はかつて使用されていた字名では大字中字ヒケシマであったため、遺跡の名称としたが、現在では町名地番変更により大野城市御笠川4丁目と川久保1丁目となっている。本市の東部には古代の山城大野城が築かれた四王寺山があるが、その北に連なる乙金山の西側の平野部に位置する。福岡平野全体で見ると東南部の山際に位置し、微視的には月隈丘陵と四王寺山塊に囲まれた平地に立地する。遺跡の西側には御笠川が北流している。

ヒケシマ遺跡は主に弥生時代の遺跡であることから、弥生時代の遺跡を中心に周辺の遺跡の分布状況を見てみると、南東に接するように甕棺墓と木棺墓で有名な中・寺尾遺跡があり、さらに同遺跡に隣接して同じ弥生時代の集落や甕棺墓地である森園遺跡がある。これら中・寺尾遺跡、森園遺跡、ヒケシマ遺跡の3遺跡はそれぞれ隣接しており、吉野ヶ里遺跡の例などから一つのまとまりとして捉えたほうが良いかもしれない。

また、森園遺跡の北東100mに松葉園遺跡、北東約400mに前期の甕棺と副葬小壺が見つかった御陵前ノ椽遺跡があった。さらに南側に目を転じれば、南東約900mに弥生時代の集落跡だったと思われる銀山遺跡、また南約600mには箱式石棺から内行花文鏡が出土した原門遺跡があった。

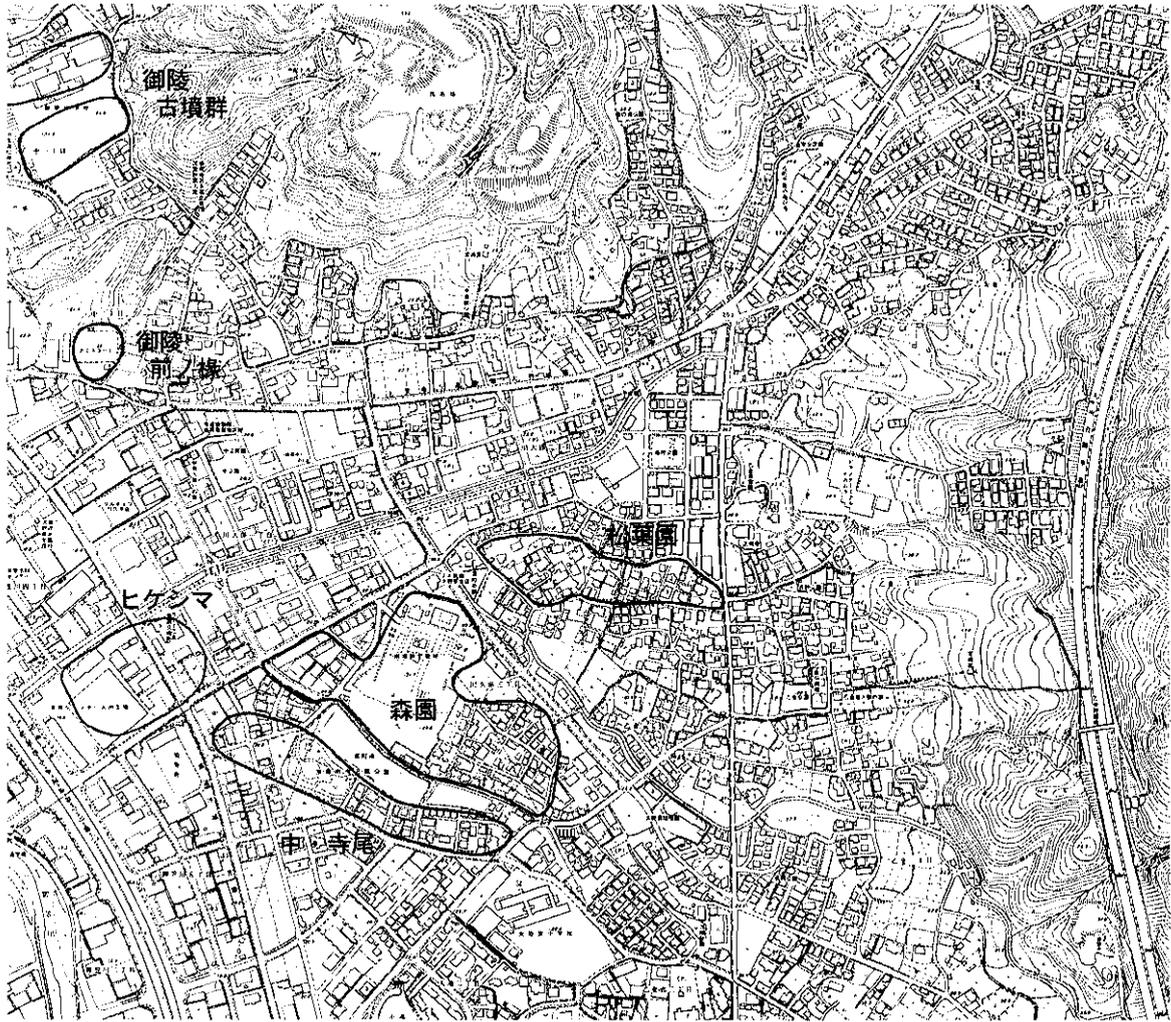
さらに目をやや外に転じると、有名な板付遺跡（福岡市）は北西約3.5 km、須玖岡本遺跡（春日市）は西南西約3.2 km、甕棺墓地として国の史跡に指定されている金隈遺跡（福岡市）は北北西約2 kmに位置している。

以上のようにヒケシマ遺跡の周辺には著名な弥生時代の遺跡が多い。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

- |              |             |             |           |
|--------------|-------------|-------------|-----------|
| 1. 持田ヶ浦古墳群   | 2. 御陵古墳群    | 3. 今里不動古墳   | 4. 塚口遺跡   |
| 5. 御陵前ノ椽遺跡   | 6. 喜一田古墳群   | 7. 王城山古墳群   | 8. 古野古墳群  |
| 9. 花園遺跡      | 10. 薬師の森遺跡  | 11. 松葉園遺跡   | 12. 森園遺跡  |
| 13. 中・寺尾遺跡   | 14. ヒケシマ遺跡  | 15. 平隈遺跡    | 16. ウド遺跡  |
| 17. ウド古墳     | 18. 榎町遺跡    | 19. 銀山遺跡    | 20. 原口古墳群 |
| 21. 原門遺跡     | 22. 雉子ヶ尾遺跡群 | 23. 曲目遺跡    | 24. 深町古墳  |
| 25. 金山遺跡     | 26. 金山古墳    | 27. 笹原古墳    | 28. 成屋形遺跡 |
| 29. 裏ノ田遺跡    | 30. 水城跡     | 31. 池ノ上遺跡   | 32. 向谷北遺跡 |
| 33. 九州大学構内遺跡 | 34. 池田遺跡    | 35. 官道推定ライン | 36. 御供田遺跡 |
| 37. 後原遺跡     | 38. ハザコ遺跡   | 39. 原ノ畑遺跡   | 40. 国分田遺跡 |
| 41. 瑞穂遺跡     | 42. 石勺遺跡    | 43. 村下遺跡    | 44. 雑餉隈遺跡 |
| 45. 川原遺跡     | 46. 仲島遺跡    | 47. 井相田遺跡群  | 48. 麦野遺跡群 |
| 49. 南八幡遺跡群   | 50. 雑餉隈遺跡群  | 51. 駿河遺跡    | 52. 伯玄社遺跡 |
| 53. ナライ遺跡    | 54. 西平塚遺跡   | 55. 高辻遺跡    | 56. 惣利窯跡群 |



第2図 ヒケシマ遺跡位置図 (1/5000)

最後にヒケシマ遺跡周辺に限って見ると、遺跡の東側の山々から西に伸びる丘陵先端部やその先の平地部には弥生時代の集落や墓地が多く立地していたことがわかる。また、近年の調査成果から丘陵の基部には薬師の森遺跡のように奈良時代や鎌倉時代の遺跡が立地していることがわかってきた。さらに、東側山麓には50基以上の古墳から形成される乙金古墳群、北側の山には持田ヶ浦古墳群などの古墳群があり、山麓、丘陵基部、丘陵先端部とその先の平地という立地環境の違いと遺跡の性格の違いが明瞭に表れている地域であることが判明してきた。

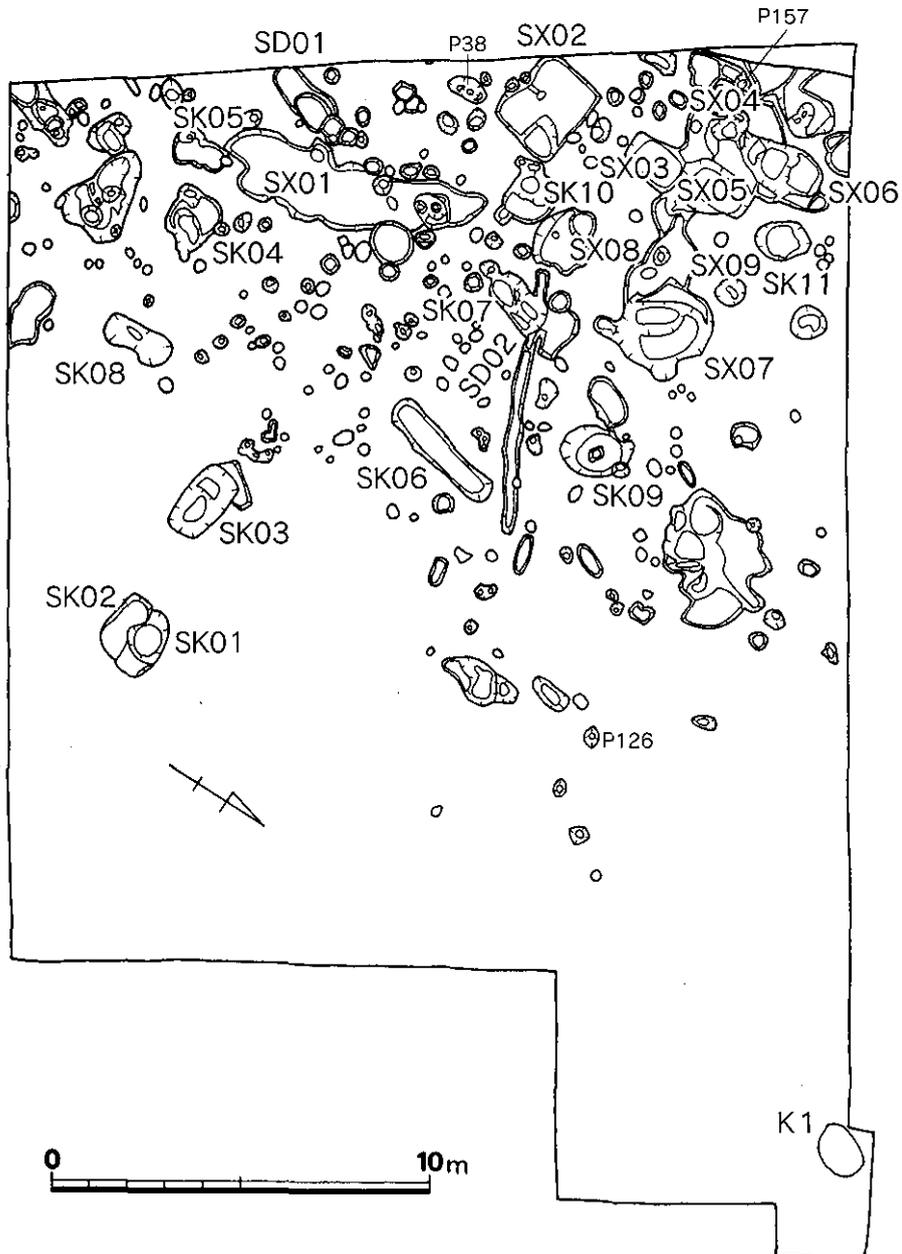
- <註1> 『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第三集 大野町教育委員会 1971  
『中・寺尾遺跡』大野城市教育委員会 1977
- <註2> 『森園遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会 1988
- <註3> 『牛頸地区遺跡群Ⅰ』付編 大野城市教育委員会 1985
- <註4> 『御陵前ノ椽遺跡』大野城市教育委員会 1997
- <註5> 『福岡市金隈遺跡第一次調査概報』福岡市教育委員会 1970  
『福岡市金隈遺跡第二次調査概報』福岡市教育委員会 1971
- <註6> 鈴木基親・渡辺正気「福岡県筑紫郡大野町原門所在箱式石棺群出土の内行花文鏡」『九州考古学』第5・6号 1958
- <註7> 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ』福岡県教育委員会 1977

### Ⅲ. 調査の結果

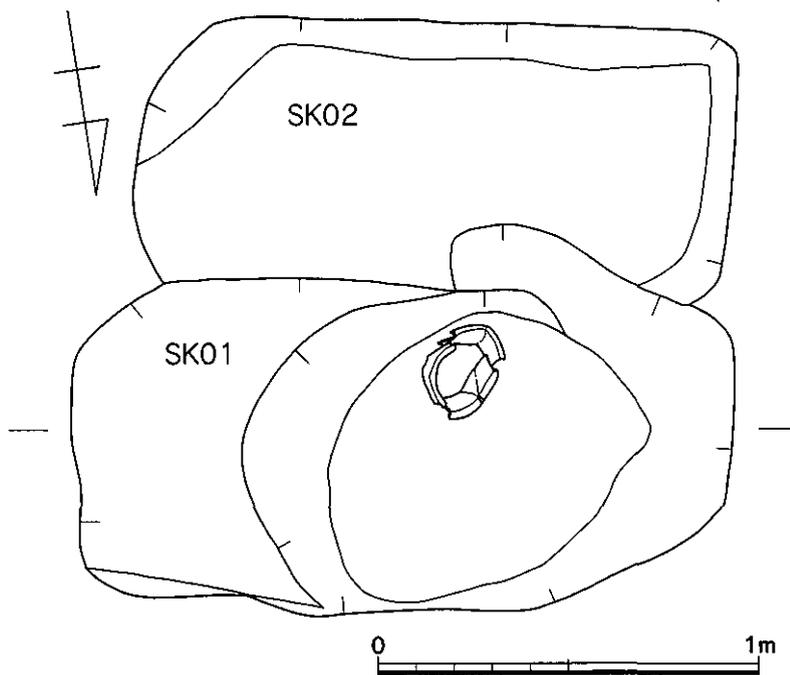
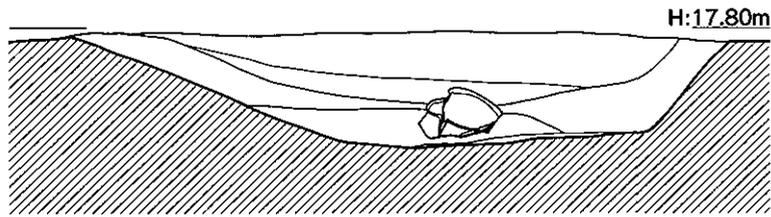
#### 1. 調査概要

##### I 次調査

調査対象地は約980㎡であったが、遺構の検出された部分は約600㎡であった。地権者の話では、発掘区のうち東南はやや高い畑であったのを削って水田にしたとのことであったが、遺構は西側に



第3図 I 次調査遺構配置図 (1/200)



第4図 I次.S K01・02実測図 (1/20)

多く検出され、そのことと合致する。

検出された遺構はおおむね形の整った土坑、不整形の土坑、方形竪穴遺構、溝、ピットそして甕棺墓である。全体に形態のはっきりしないものが多い。遺構検出時に比較的形の整った土坑をSKとし、不整形の土坑をSXとしたが、掘り下げるに従って形がはっきりしてきたものもあり、遺構名称がそのまま性格を表すものではないことが判明したが、遺物取り上げの遺構名を代えると混乱することから、そのまま報告する。

遺物の時期は基本的に弥生時代中期それも前半のものが多く、古墳時代の土器や縄文時代の石器も一部混ざる。

## II 次調査

I次調査地の南側に隣接した場所で、水田であった。調査面積は約780㎡である。弥生時代中期の竪穴住居跡1基、同じく甕棺墓1基、I次調査と同じような土坑やピットが検出された。土坑はすべてSKとして扱った。

遺物量は整理箱10箱であった。弥生土器が多いが、古墳時代と平安時代の土器も少し混ざる。

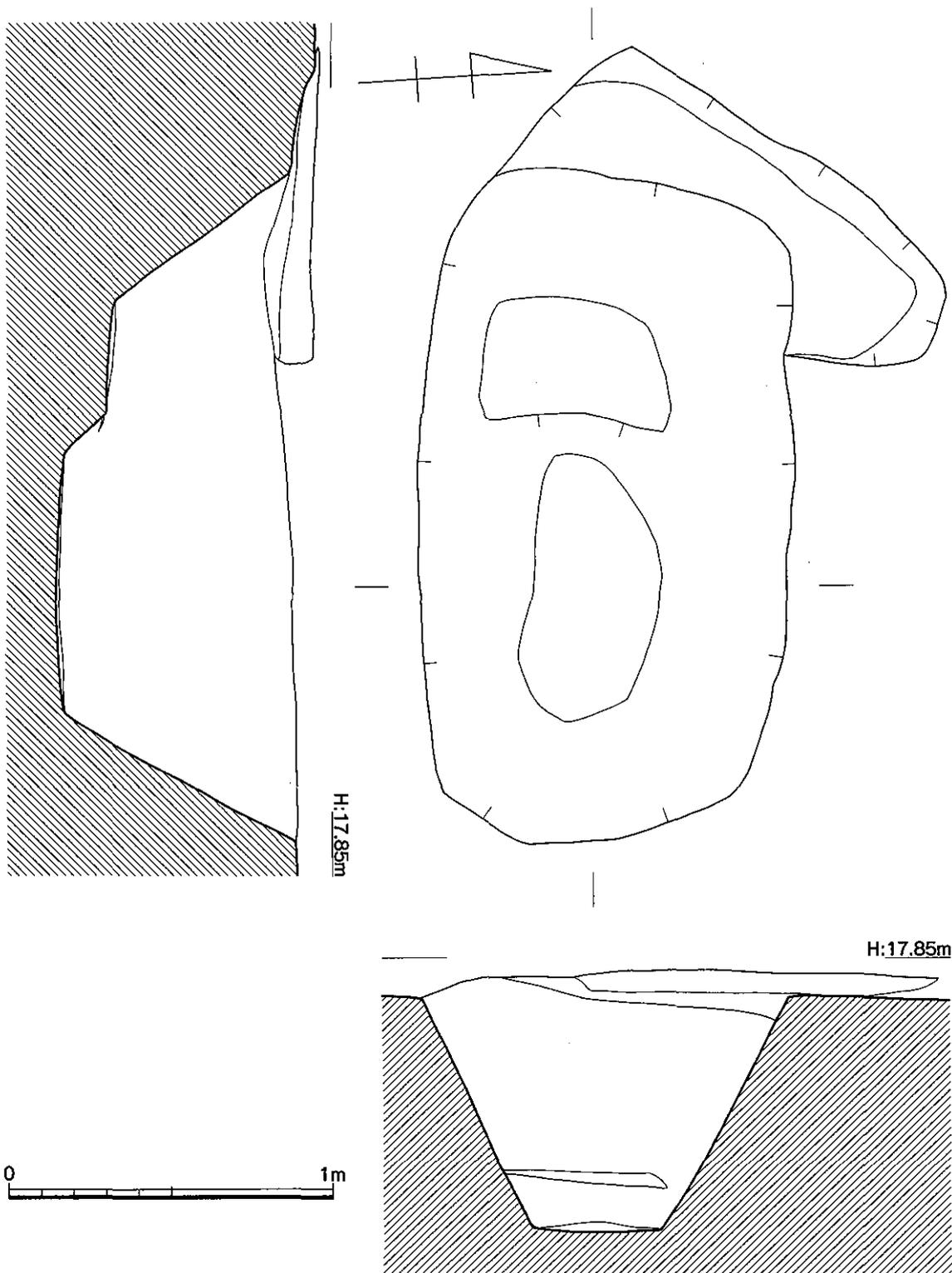
## 2. 遺構と遺物

### (1) I次調査

#### i. 土坑

#### SK01 (第4図、図版1-(2))

発掘区の東側で検出されたもので、ほぼ平行して検出されたSK02を切る。不整形の長方形を呈しているが、南側長辺の一部がふくらむ。主軸長が約1.75m、幅約0.9m、深さ約0.3mである。長軸の断面形は逆台形状を呈する。東側はやや傾斜角を変えていて、二段掘り込み状になっている。長方形と不整形の土坑が切りあっているようにも見えるが、検出面での観察や埋土の状況からも

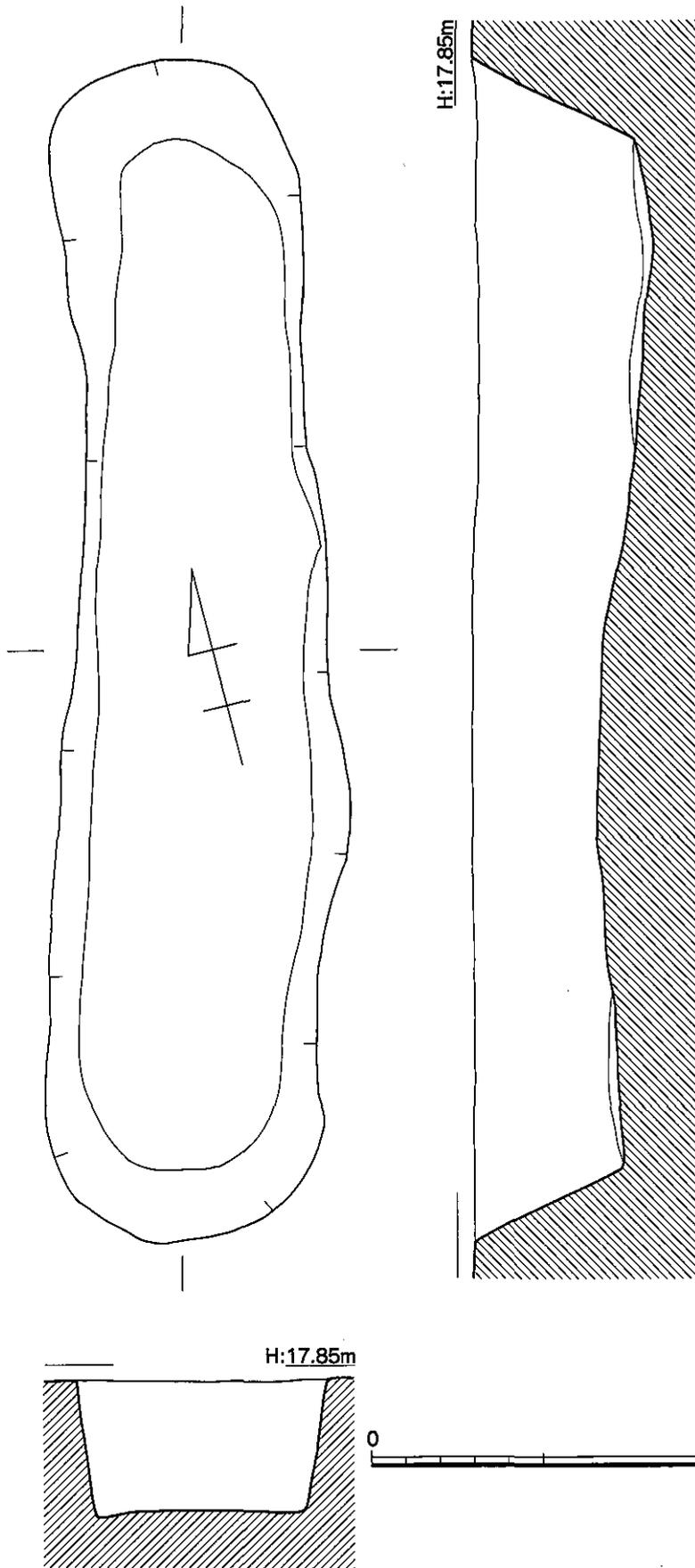


第5図 1次.S K03実測図 (1/20)

一つの土坑と考えて良いと思われる。ほぼ中央に近く、また最深部に近い部分から弥生土器の甕が出土した。

**出土遺物** (第8図、図版10)

弥生土器がビニール袋で1袋分出土した。第8図1は床面に接して出土したもので、上げ底状の底部を持つものと思われる。口縁部は如意形口縁で胴部外面ハケメ、内面ナデを行う。



第6図 I次.S K06実測図 (1/20)

**S K02 (第4図、図版1)**

S K01に切られる形で検出された。おおむね長方形を呈し、主軸長が約1.55m、幅は不明であるが約0.7m以上、深さ約0.2mである。長さがS K01よりやや短いがほぼ平行している。長軸断面形も良く似ている。出土遺物はない。

**S K03 (第5図、図版2)**

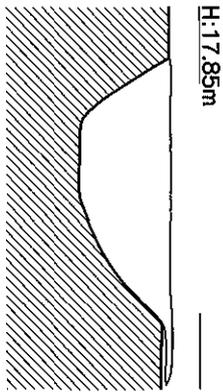
発掘区の東側、S K02の西約2mの位置で検出されたもので、おおむね長方形を呈しているが、西側短辺は他の落ち込みを切るか。底部は段をなす。主軸長が約2.1m、幅約1.15m、深さは浅い方で約0.55m、深い方で0.7mである。長軸の断面形は段が付く逆台形状を呈する。底面形はそれほど整っていないが、ほぼ平坦である。

**出土遺物 (第8図)**

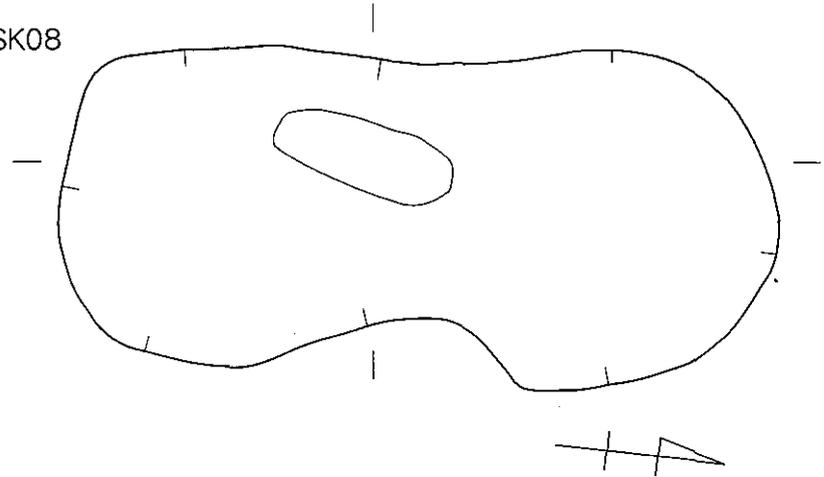
ビニール袋でほぼ4分の1袋分出土した。第8図2は弥生土器底部であるが、城ノ越式に特徴的なものである。

**S K06 (第6図)**

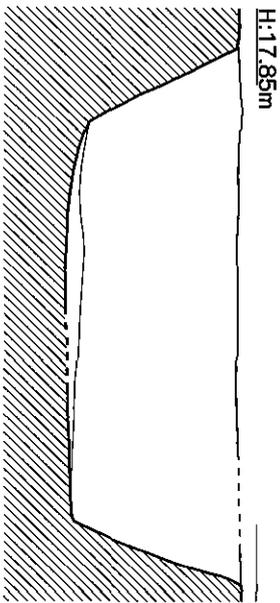
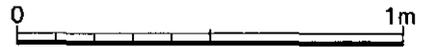
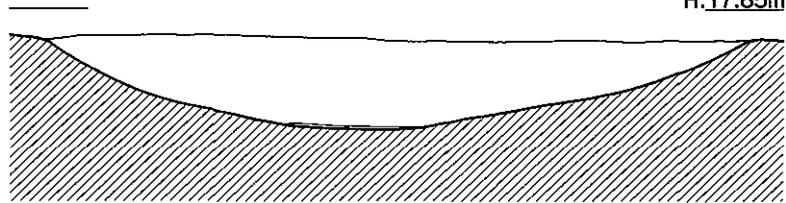
発掘区の中央部、S K03の北西約4.5mの位置で検出されたもので、細長く両端の丸い長方形を呈してい



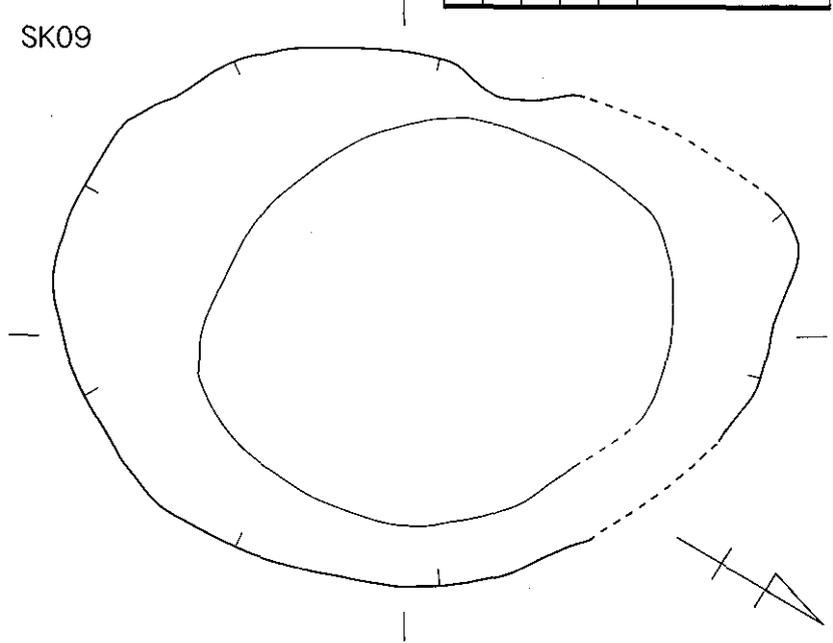
SK08



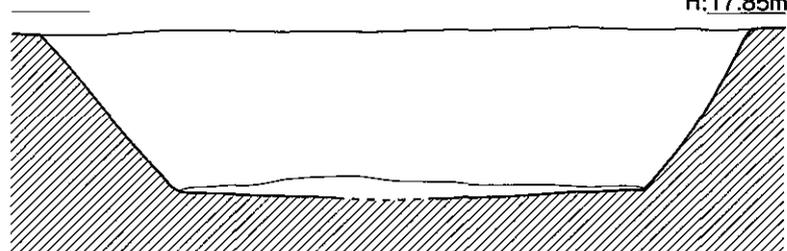
H:17.85m



SK09



H:17.85m



第7图 I次.S K08・09実測図 (1/20)

る。主軸長が約3.45m、幅は広い部分で約0.85m、狭い部分で0.55m、深さは中央西寄りがやや浅く約0.35m、南端が深く0.5mである。この結果、底部は第6図に見るとおりゆるやかな起伏を持つ。

#### 出土遺物（第8・19図）

弥生土器が整理箱1箱分出土した。6は壺で、頸部と胴部の境に突帯を持つものである。頸部内面にはミガキを施したような幅5mmほどの原体の調整痕が残るが、強いナデであろう。7は口縁部があまり外面に伸びない甕で、8は端部に平坦面を作り、口縁下には断面三角形の突帯を作る甕である。9と10は底部であるが、9は壺、10は甕であろう。

第19図10は一面がつるつるになっており、砥石として使用されたものかと思われるが、図で薄く塗った面が赤色になっており、使用方法について検討を要する。

#### SK08（第7図）

発掘区の西南、SK06の南約6mの位置で検出されたもので、ゆがんだひょうたん形を呈する。主軸長が約1.85m、最大幅0.85mを測る。主軸断面形はゆるやかな船底状を呈し、中央部が最も深く約0.25mである。

#### 出土遺物（第8図）

埋土中より弥生土器がビニール袋3分の1袋分出土した。13・14ともに甕底部であるが、形態に差がある。しかし、両者とも城ノ越式に含まれる特徴的なものである。

#### SK09（第7図）

発掘区の中央やや北寄り、SK06の北西約2mの位置で検出されたもので、楕円形を呈する。長軸長が約1.9m、短軸長約1.4mを測る。両軸とも断面形は逆台形を呈し、深さ約0.4mである。床面はほぼ平坦である。

#### 出土遺物（第8・19図）

埋土中から弥生土器がビニール袋で2分の1袋分ほど出土した。15・16は甕である。15の調整は外面がハケメ、内面がナデであるが、16は摩滅していて調整が不明である。

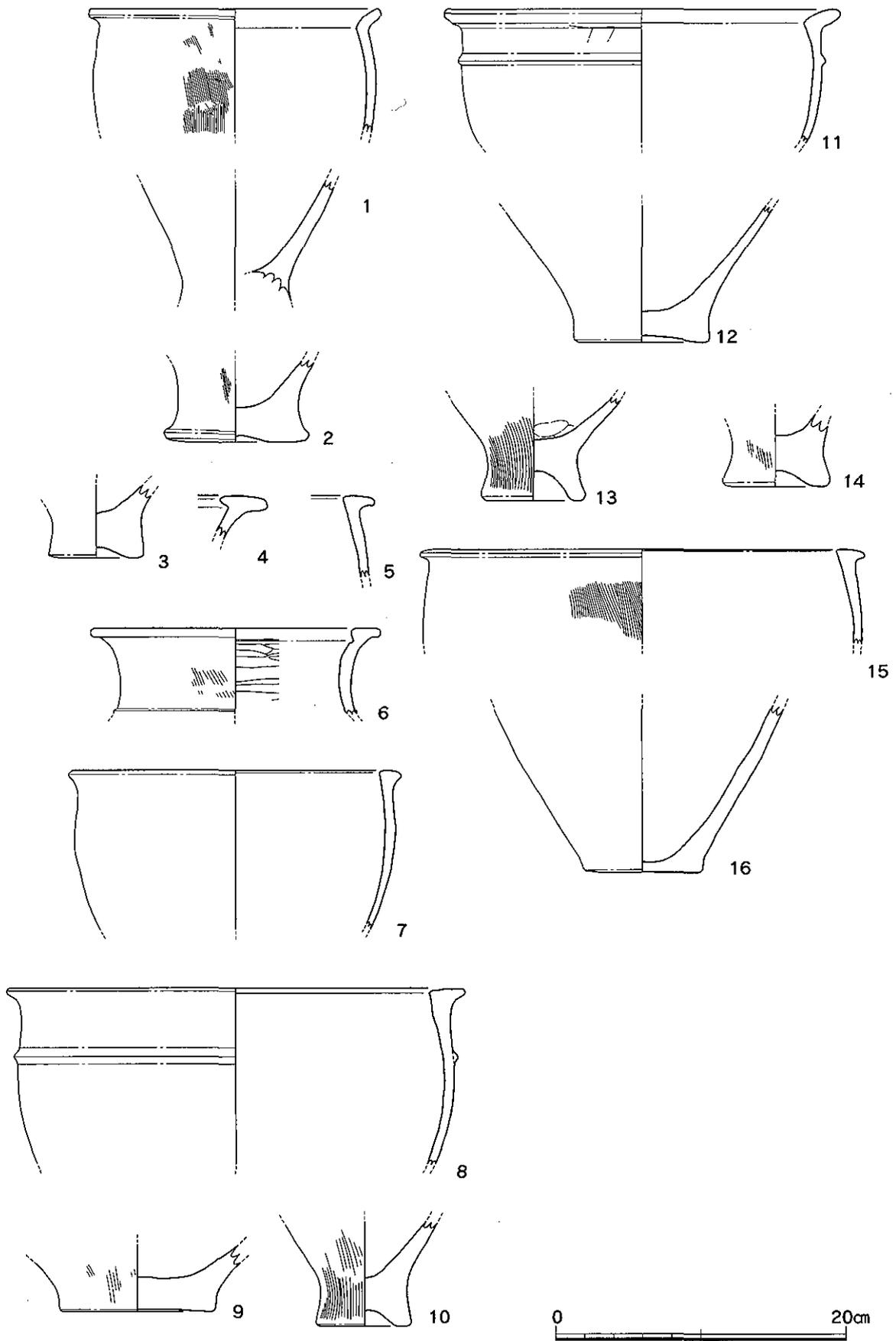
第19図1はサヌカイト製でほぼ完形の横型石匙である。最長7.7cm、重さ17.2gを測る。7は石包丁の破片である。両面から穿孔し、厚さ3mmを測るものである。

#### SK11（第9図）

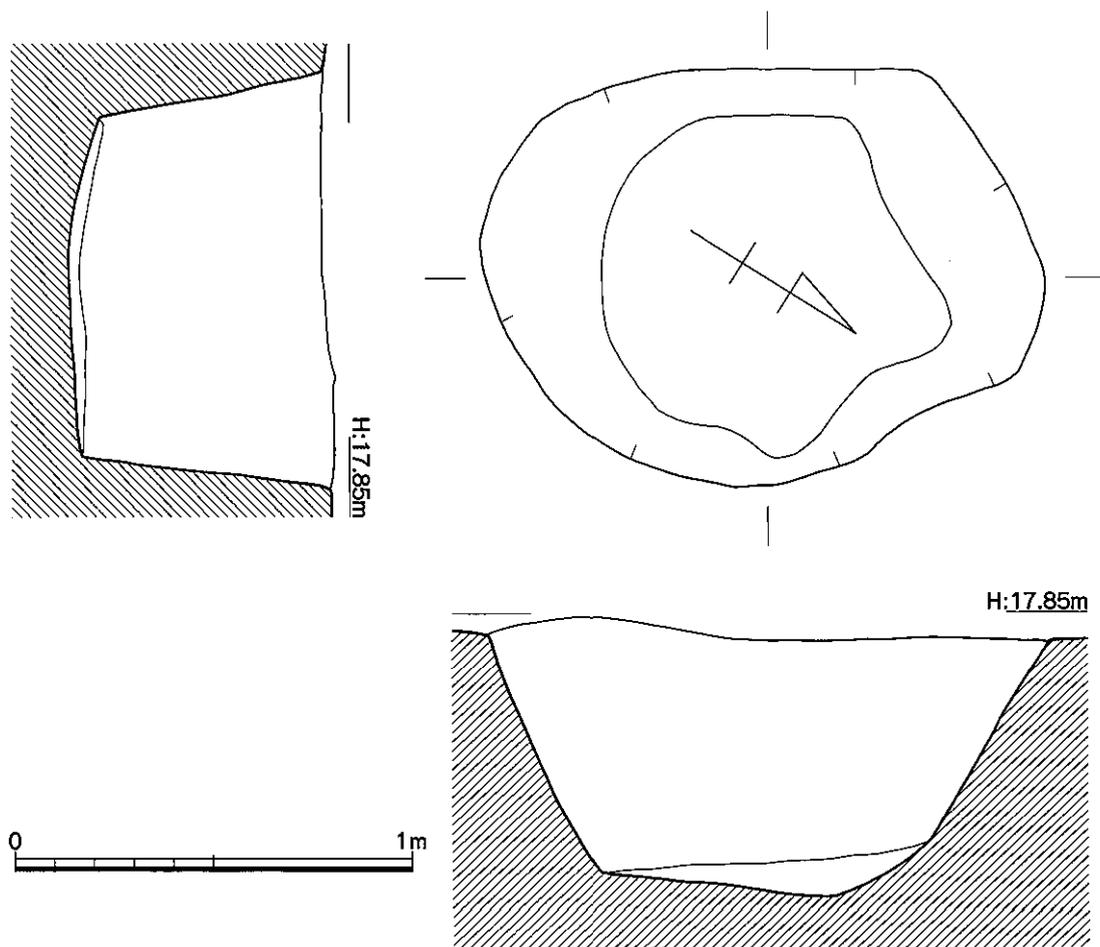
発掘区の西隅、SK09の西約6mの位置で検出されたもので、不整楕円形を呈する。長軸長が約1.4m、短軸長約1.05mを測る。断面形はおおむね逆台形を呈し、深さ約0.65mである。床面はおおよそ平坦であるが、北側がやや下がる。

#### 出土遺物（第10図、図版10）

弥生土器が出土している。それほど多くはないが、図示できる資料として19～22がある。甕は如意形口縁（20）のものと口縁端部が外へやや張り出すもの（19）がある。21・22の底部は前者に対応するものであろう。



第8图 I次土坑 (SK01~09) 出土土器实测图 (1/4)



第9図 1次.S K11実測図 (1/20)

### S X02 (第11図)

発掘区の西端、S K11の南約6.5mの位置で検出されたもので、ほぼ長方形を呈する。東西方向が南北方向に比べやや長く約2.3m、南北方向が1.8~2.0mである。床面は中央部南寄りに段があるがほぼ平坦で深さは約5cmと浅い。ピットはない。また、側壁は斜めに立ち上がる。東北部に0.95×0.95m、深さ0.35mの土坑がある。規模の小ささ、ピットの欠如、側壁の立ち上がり方などから、竪穴住居跡とは考えにくい。

### 出土遺物 (第14図、図版10)

弥生土器がビニール袋1袋分出土しているが、小破片が多い。23・24は甕の破片であるが、口縁端部がわずかに外に張り出すものである。

### S X03 (第13図、図版4・5)

発掘区の西端、S X02の北約1.3mの位置で検出されたもので、ほぼ南北方向に長い長方形を呈する。S X03~06は検出面では切りあいが観察されず、徐々に掘り下げた結果それぞれが一つの遺構として確認されたものである。南北方向に主軸を持ち、主軸長約1.6m、最大幅約1.1mを測る。断面はおおむね逆台形を呈し、深さ約0.5mである。床面は完全に平坦ではなく、中央部がゆるやかに下がる。

**出土遺物**（第14図、図版10）

弥生土器がビニール袋で2袋分出土している。小破片が多い。25・26は甕の底部であるが、上げ底状を呈するものである。

**S X 05**（第13図、図版4・5）

発掘区の西端、S X 03の北側に接して検出されたもので、短辺が丸い長形状を呈する。S X 03同様主軸を南北方向に持つ。主軸長1.95m、最大幅1.3mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ約0.9mである。床面はS X 03同様完全に平坦ではなく、中央部がゆるやかに下がる。

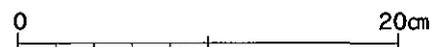
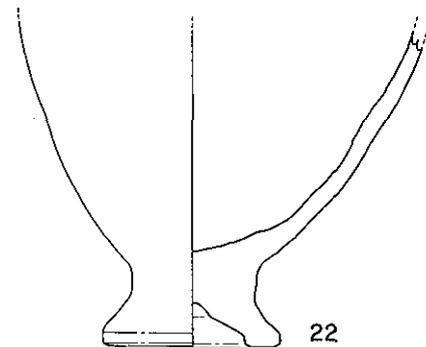
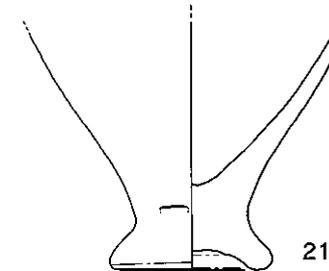
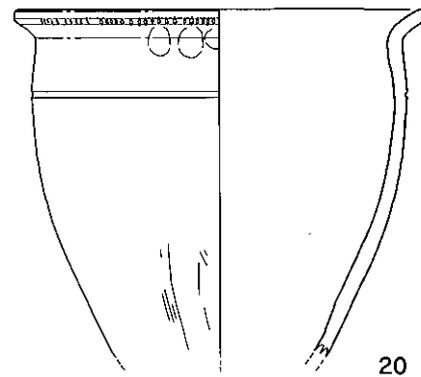
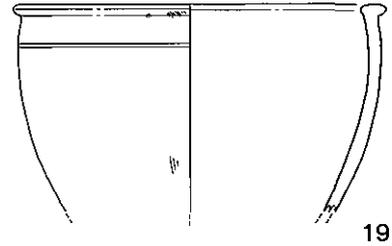
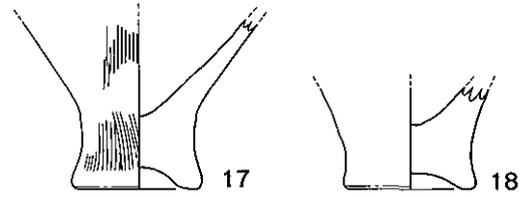
**出土遺物**（第14図、図版11）

弥生土器がビニール袋で3袋分出土している。29・30は甕、31・32は壺の口頸部である。33は器台で、ほぼ完形である。分厚い作りで外面には指頭痕がある。

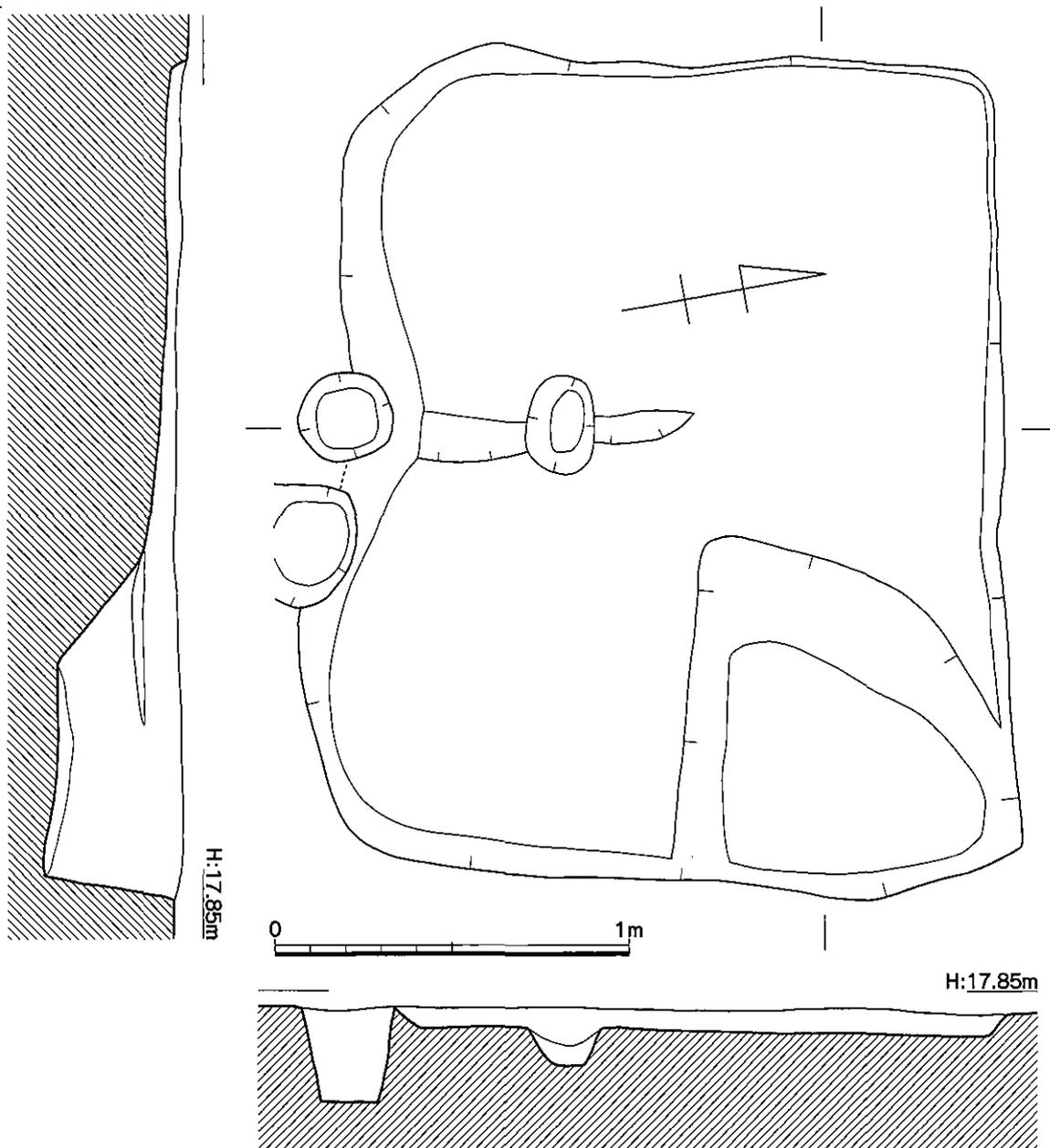
**その他の土坑出土遺物**（第8・14・19図、図版10～12）

**土器** 第8図3・4はS K 04出土の弥生土器で、3の甕は上げ底状を呈する。同じく5はS K 05出土の甕口縁部である。第14図27・28はS X 04出土の弥生土器である。28は比較的残りの良い甕で、如意形口縁の口縁下に1条の沈線を持つものである。おそらく底部は上げ底状を呈するものであろう。34・35はS X 07出土の弥生土器で、これも如意形口縁の口縁下に1条の沈線を持つものである。36はS X 08出土の甕破片で口縁端部がわずかに外へ張り出すものである。37・38はS X 09出土の甕破片である。38は復元口径47cmを測る大型の甕である。

**石器** 第19図3はS K 10からの出土で、石鎌であろうか。左右が折れているが、両面を研磨している。横長に置いたときの左右の厚さが違う。図の左側が厚く、右側がやや薄い。研磨によって刃部を作り出している。背は少し欠けている。淡いあずき色を呈している。2はS X 01出土のほぼ完形の縦型石匙で



第10図 I次土坑（S K 10～11）  
出土土器実測図（1/4）



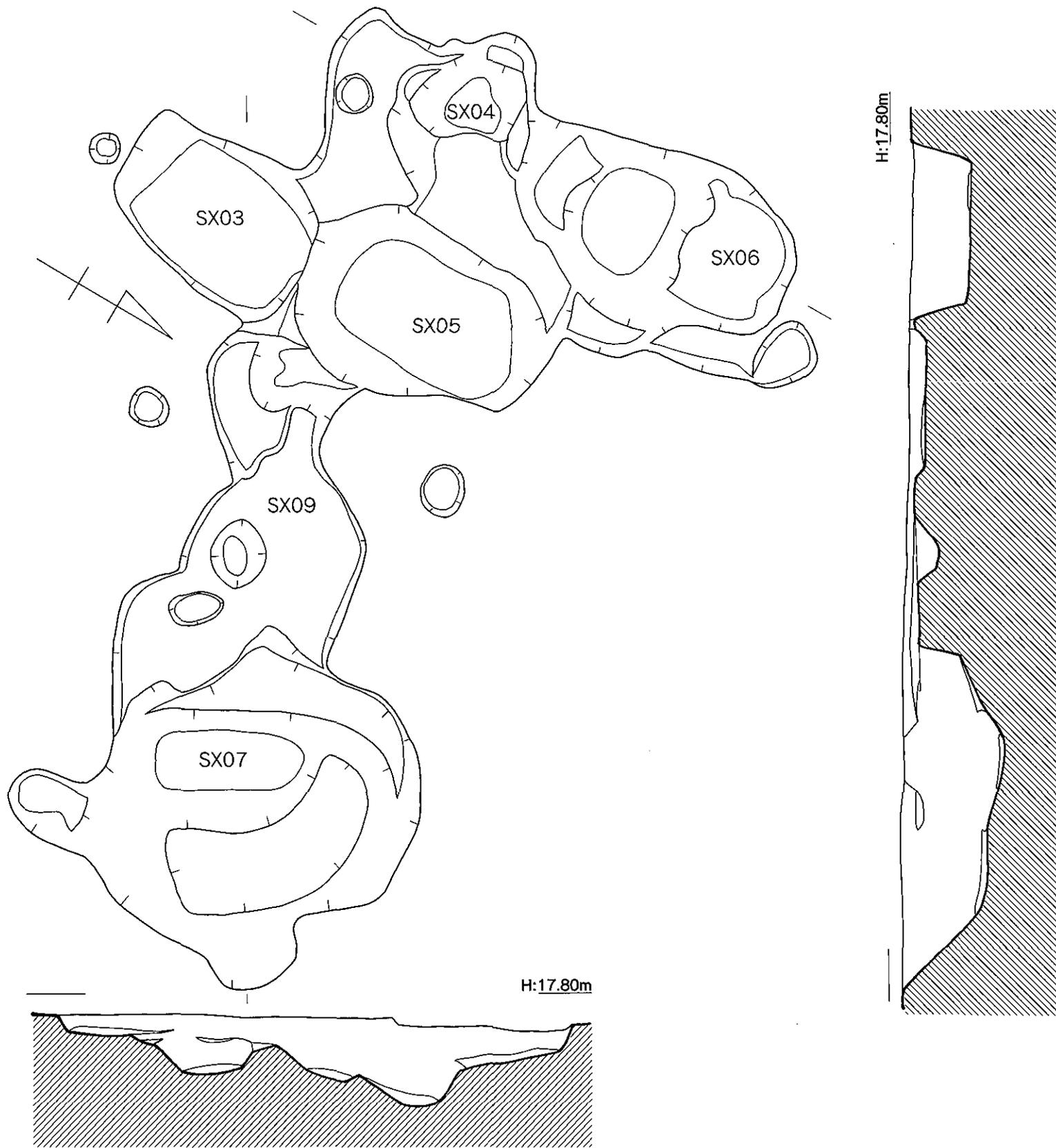
第11図 I次.S X02実測図 (1/20)

ある。長さ7.1cm、幅2.7cm、厚さ1.1cmを測る。サヌカイト製である。5はS X08出土の石製紡錘車である。滑石と思われる灰白色を呈する。4はS X09出土の石製紡錘車である。5より一回り小さいが同じく滑石製と思われる。縁辺部がだいぶ壊れている。9もS X09出土で、磨製石斧である。刃部は欠けている。

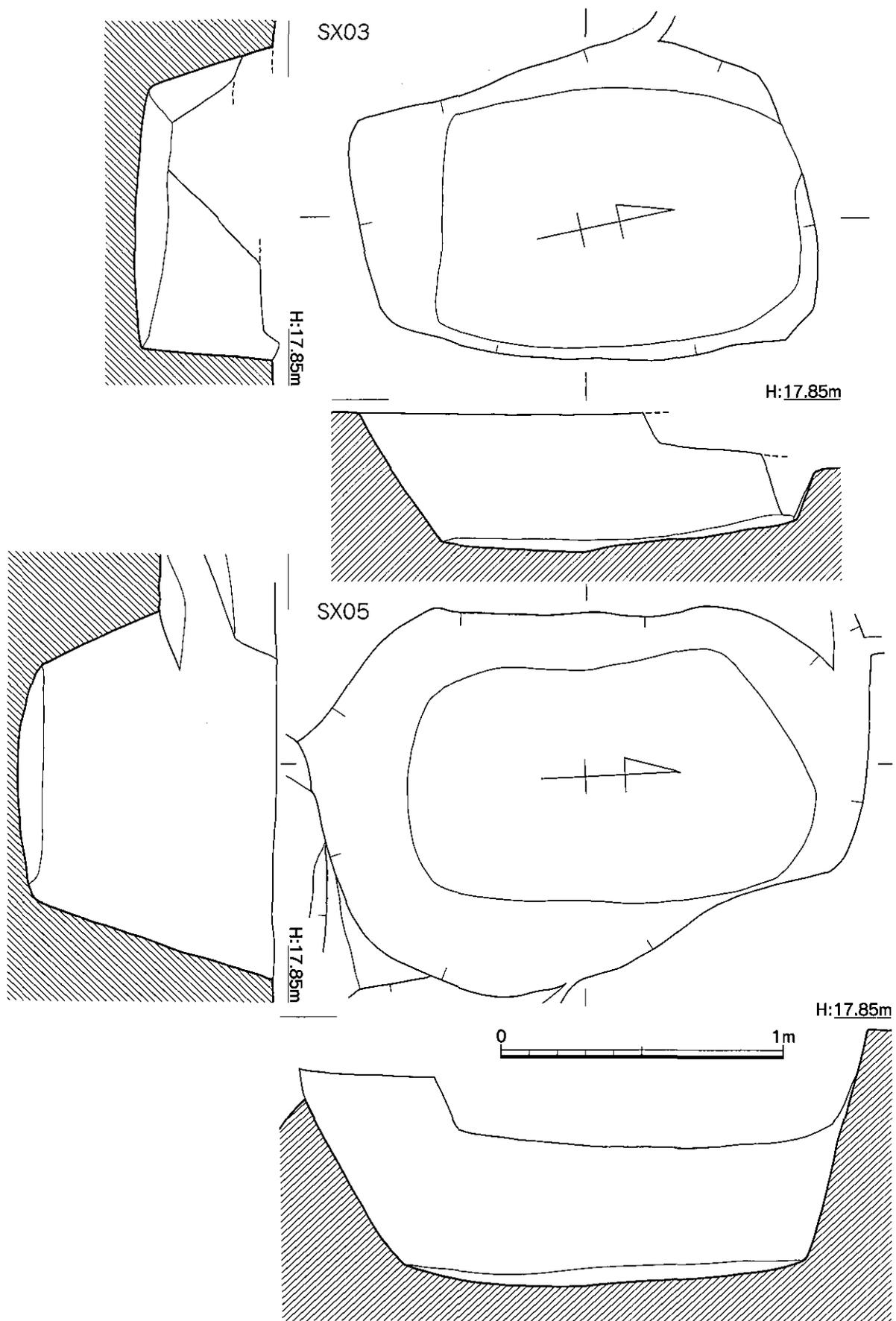
## ii. 溝状遺構

### SD01

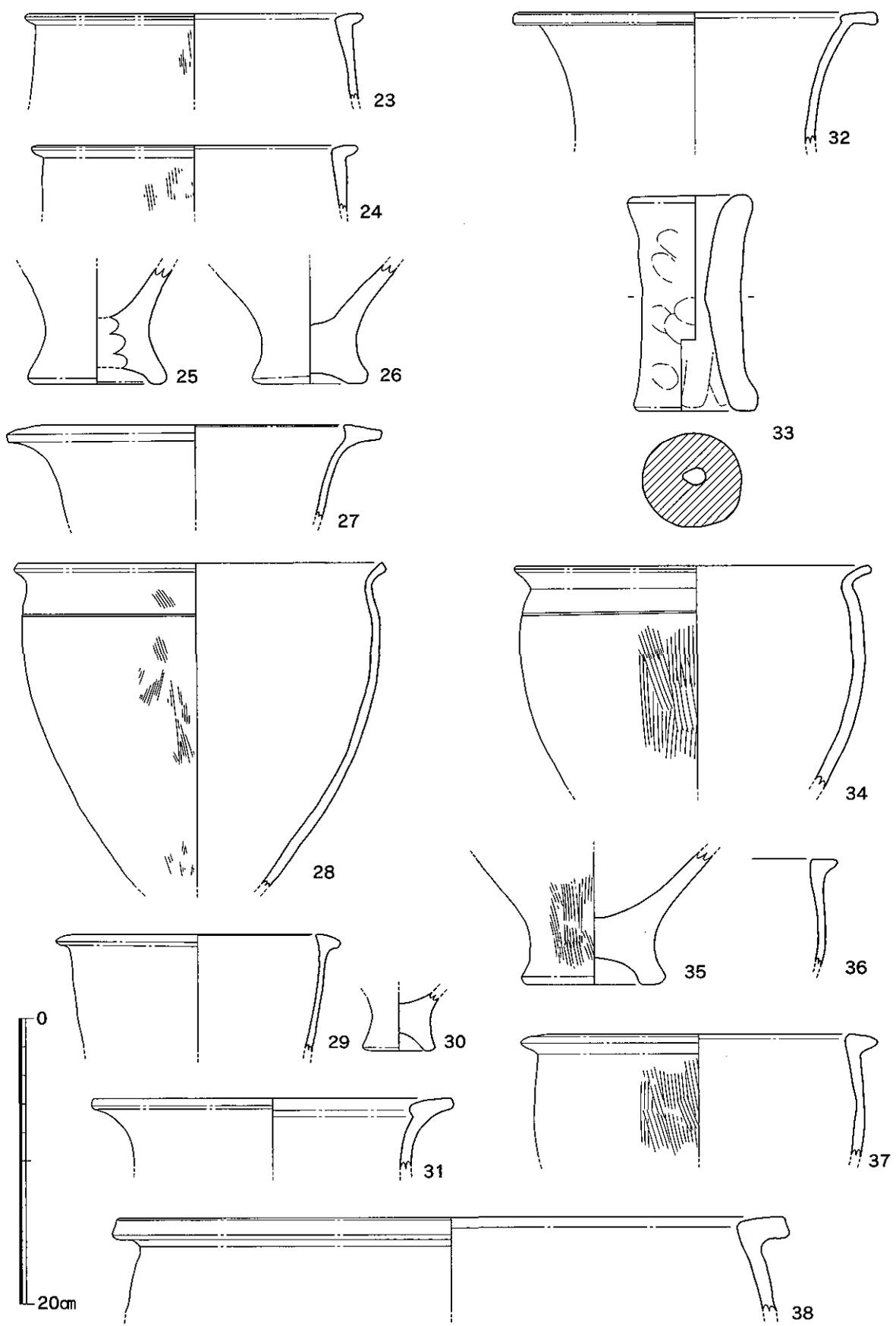
発掘区の西寄り、S X01の西で検出されたもので、発掘区の外へ続いていくものである。幅約0.8 m、深さ約0.1 mを測る。北端部は楕円形の土坑状に約0.1 m下がる。



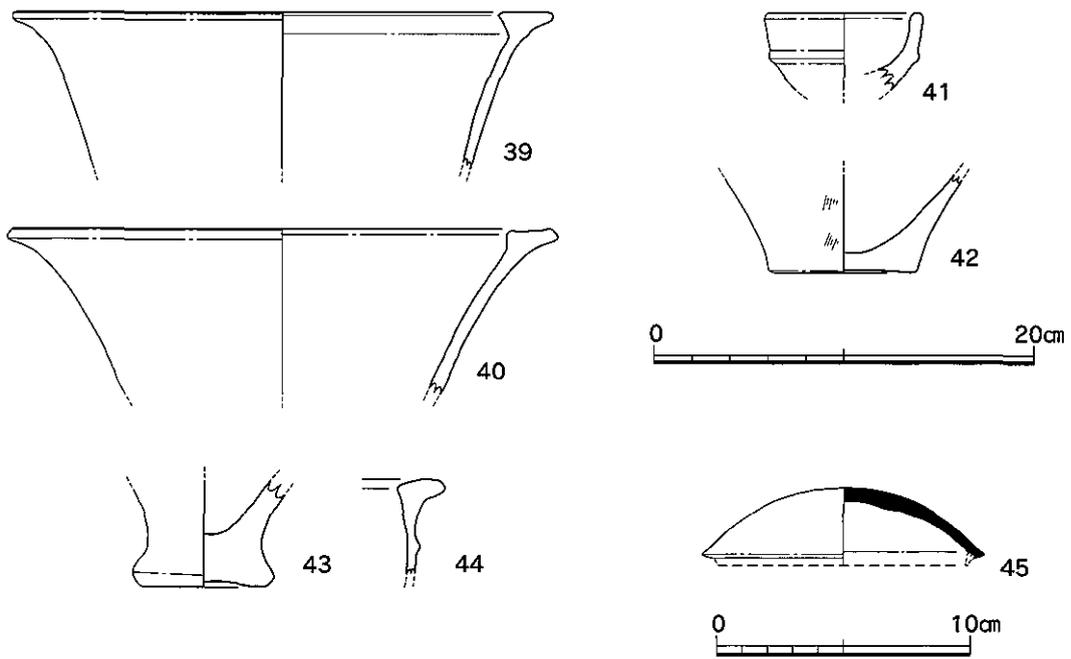
第12図 I次.S X03~07・09実測図 (1/40)



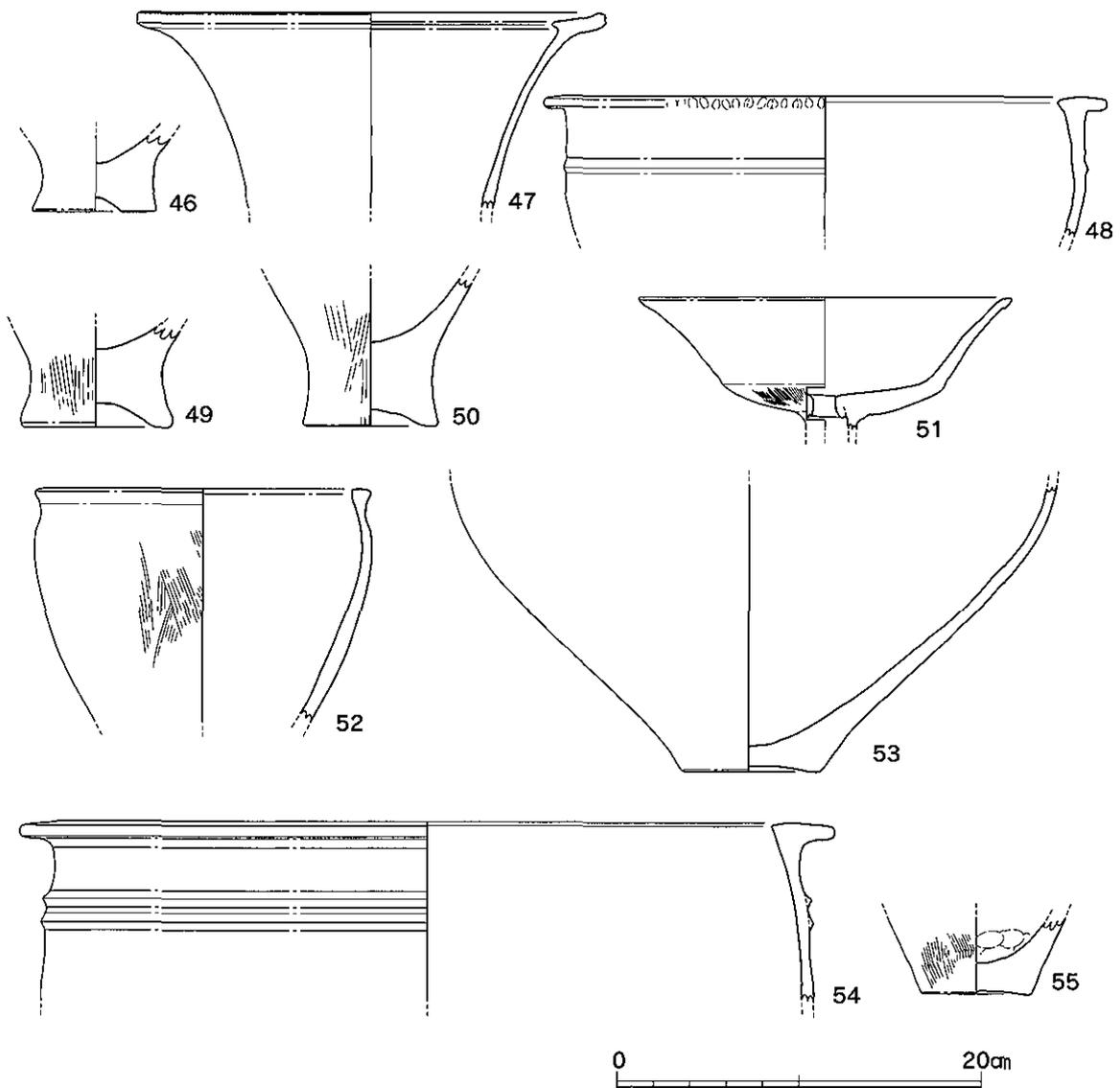
第13図 I次.S X03・05実測図 (1/20)



第14图 I次土坑(SX02~09)出土土器实测图(1/4)

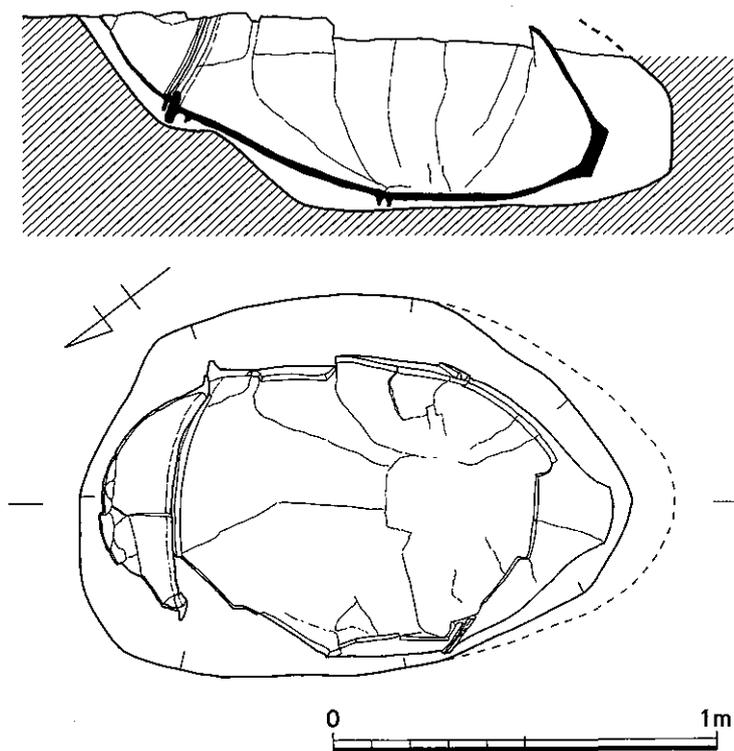


第15図 I次.S D01~02出土土器実測図 (1/4)



第16図 I次.ピット出土土器実測図 (1/4)

H:18.00m



第17図 I次.K1実測図(1/20)

#### 出土遺物(第15図)

弥生土器が整理箱で1箱分出土している。しかし、いずれも小破片で、図示できるのは少ない。39・40は壺の口頸部であるが、磨耗が進み調整ははっきりしない。41も小破片であるが、口径8.4cmの小型器種で鉢と考えた。調整は摩滅のためはっきりしない。42は甕の底部で、外面にはハケメが残るが、内面の調整は不詳である。

#### SD02

発掘区中央で検出されたもので、ほぼ直線的に7mほど伸びるものである。幅約0.4m、深さは5～10cmを測る浅いものである。土坑と切りあうが、先後関係は不明であった。

#### 出土遺物(第15図、図版11)

遺構の規模に比べ、出土土器はやや多く整理箱2箱分である。しかし、図示できるのはほとんどなく、第15図45の1点に留まる。須恵器杯蓋で、かえりは失われている。橙色をした焼きの悪いものである。

#### iii. 甕棺墓

##### K1(第17図、図版5-(2))

発掘区北端で単独で検出された。かなり削平された状態であった。墓坑掘り込み面での形状は不明である。下甕には大型の甕を用い上甕には鉢を用いている。接口式で、傾斜角は $+22^\circ$ である。

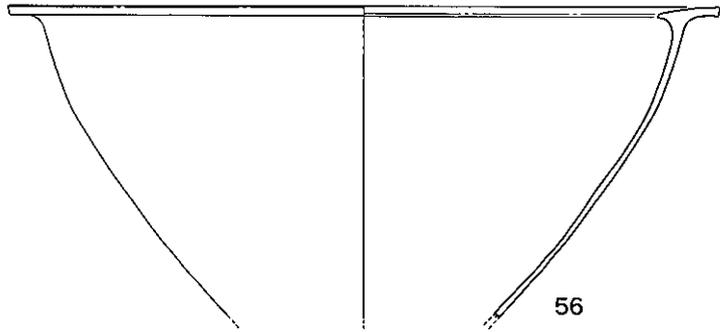
#### 出土遺物(第18図、図版15)

上甕は鉢で底部を欠く。鋤先状口縁を持つ。下甕は高さ107.7cm、復元口径72.4cmを測る大型の甕でT字状を呈する口縁を持つ。また口縁下に1条、胴部に2条の突帯を持つ。

#### iv. ピット出土遺物(第16・19図、図版11・12)

**土器** ピットからも小破片ながら土器が出土している。出土ピットと土器の詳細は観察表に記述しているが、51を除きその他は弥生土器である。51の高杯はP126から出土した土師器で、脚部との接合に際し円盤充填した後に穿孔しているように観察できる。

**土製品** 第19図6はP38からの出土で投弾である。長さ5.35cm、幅2.0cm、重さ10.7gである。8はP157から出土した支脚である。上端中央部に1条のくぼみがある。胎土に白色砂粒が目立つ。

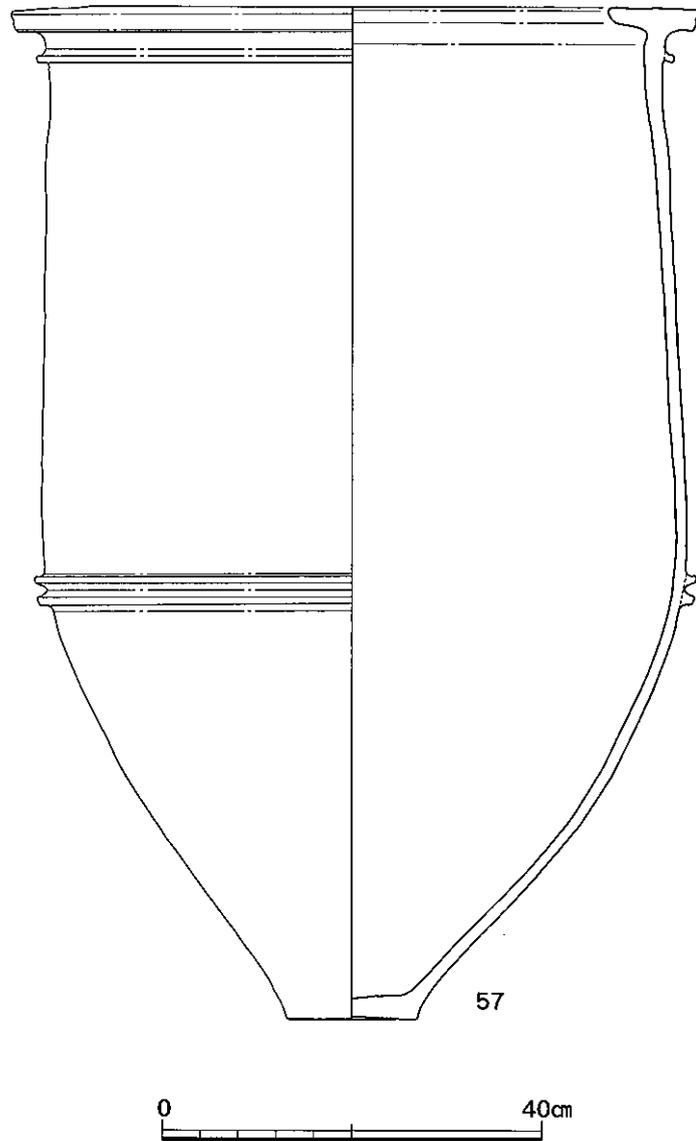


## (2) II次調査

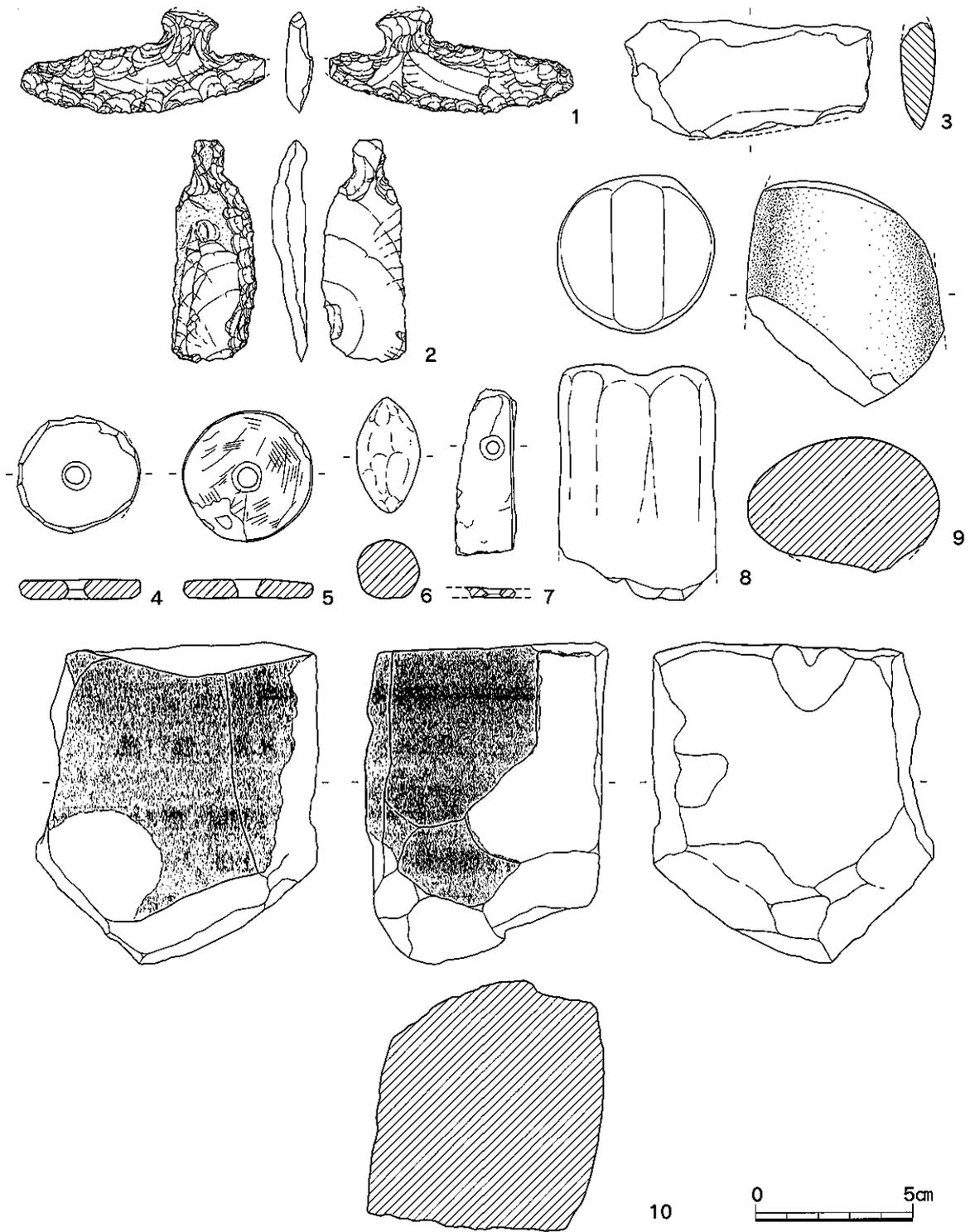
I次調査区の南側の水田であった場所で、遺構が検出されたのは発掘区西寄りの3分の2ほどの範囲に留まる。I次調査区からのつながりを考えると、遺構の検出されなかった部分はだいぶ削平されたものと考えられる。甕棺墓K2は東側の遺構の少ない部分で見つがっているが、I次調査K1と同様かなり上部が削られており、発掘区東側は丘陵状に高まりがあったのだろう。そしていつの時代かに削平されたものであろう。

遺構検出部分では多くの落ち込みが検出されたが、形の整わないものがほとんどである。また、ピットとすべきか、土坑とすべきか迷うものが多かった。ここで土坑として報告するのは2基だけである。他に報告するのは、上記甕棺墓1基、そして壁面はすでに失われているが、ピットの配置状況から円形の堅穴住居跡と考えられるもの1基である。

なお、II次調査ではピットとすべきか土坑とすべきか迷うものが多かったことから、すべてSKを冠して遺物を取り上げた。混乱を避けるため、報告も調査時の記号と番号で行なう。



第18図 I次.甕棺 (K1) 実測図 (1/8)

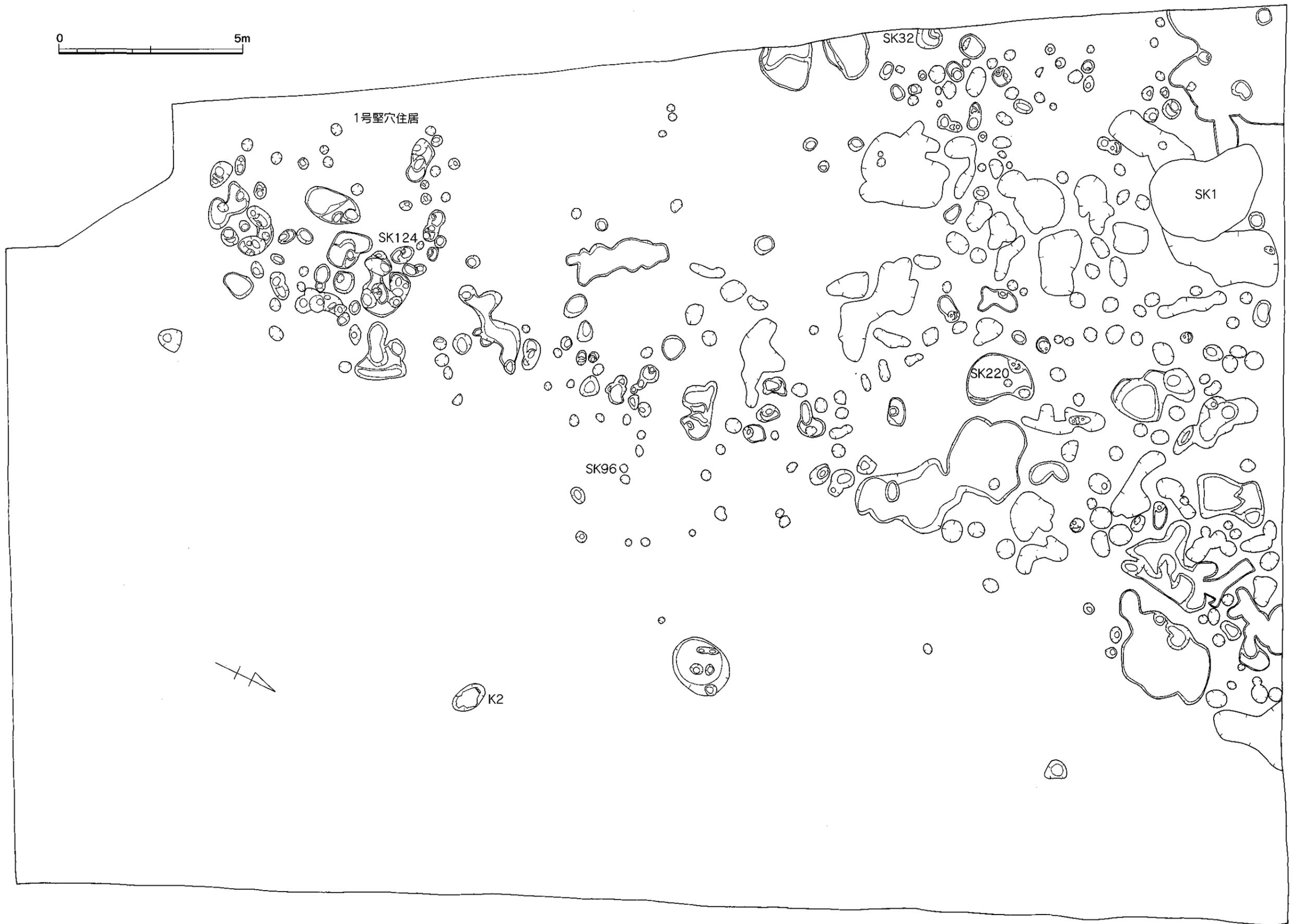


第19図 I次.石器・土製品実測図 (1/2)

i. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第21図、図版9-(1))

発掘区西南隅で検出されたものである。既に側壁は失われているものであるが、ピットが円形に並ぶことから、住居跡と考えたものである。しかし、ピットが円形に並ぶとはいえ、正確に本来の



第20図 II次調査遺構配置図 (1/100)



第21図 II次.1号竪穴住居跡 (1/60)

柱穴を断定することはできない。第21図に示すとおり、ピットが錯綜しているからである。側壁が失われていることから規模は不明であるが、ピットのやや外側に壁があったとすると、直径は7mほどに推定される。ほぼ中心部に1.6×0.85mの楕円形土坑がある。炉跡と考えられる。ピットの深さはまちまちだが、深いものは40～50cmである。ピットの配列を見ると、北東部と南東部の一部に配列方向とは直角方向に2口ずつ対になるような部分がある。西側部分が未掘であることから、未確認部分も多いが、あるいは同心円的に拡張した跡かもしれない。

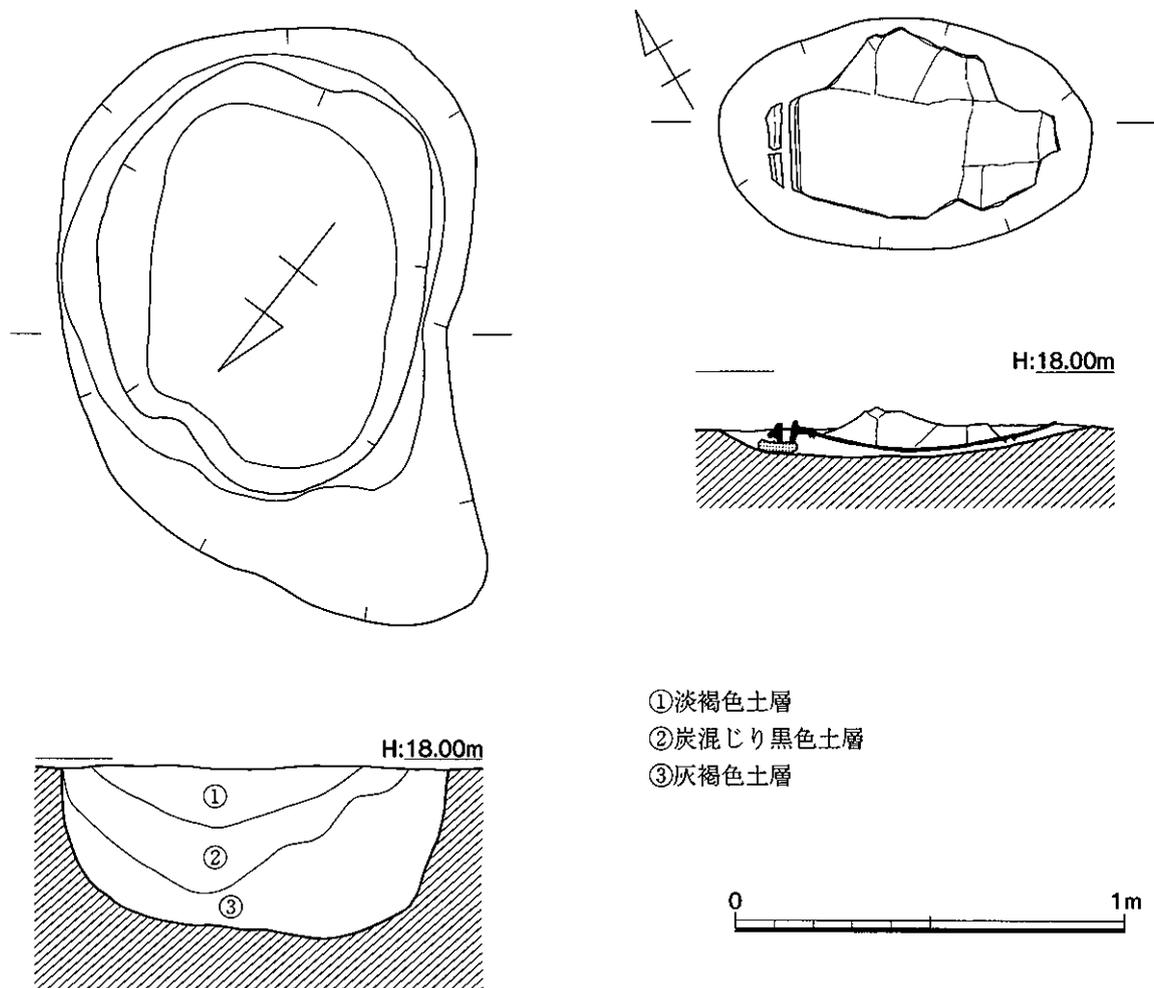
#### 出土遺物 (第24図)

ピットからの出土遺物は多くなく、また小破片である。第24図10は甕口縁部の破片で、外に張り出す部分は短い。

#### ii. 土坑

##### SK01 (第22図、図版7)

発掘区西隅で検出されたもので、不整楕円形を呈している。一部張り出すが、その部分をはずすと、おおむね長軸方向で1.4m、短軸方向で1.05mを測る。断面は幅広のU字形を呈し、深さ約0.4mである。埋土は3層に分かれ、上から1層目が淡褐色土、2層目が炭混じり黒色土、3層目が



第22図 Ⅱ次.SX01・K2実測図(1/20)

灰褐色土であった。弥生土器が出土しているが、ほとんどが2層からだった。

#### 出土遺物(第23・27図、図版13)

弥生土器が整理箱で3箱分出土している。第23図1～6は甕である。口縁部が短く外反し底部は上げ底状を呈するものである。外面はハケメ、内面はナデである。2は本遺跡出土遺物の中では残りが非常に良い。7～9は壺で、8は頸部と胴部の境に突帯を持つ。

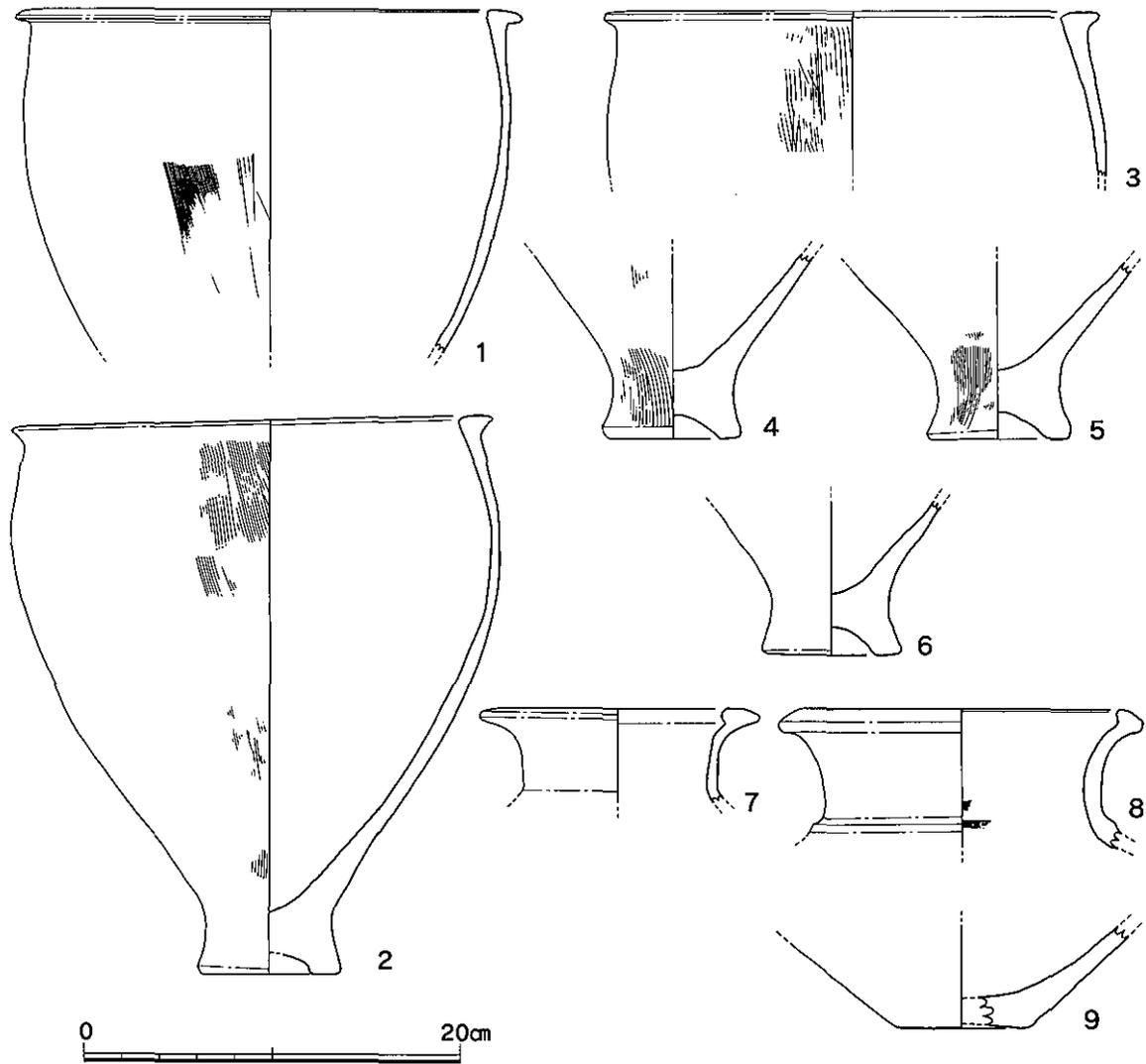
第27図5は砥石である。砂岩質の石であるが、砥いだ面が必ずしも平坦ではなく、どのようなものを砥いだものか。6は土師質の直方体状の土製品で支脚と考えた。7は土師質の円柱状の土製品で、これも支脚と思われる。8は小型の土製品でミニチュアの蓋と思われる。

#### SK220(図版8)

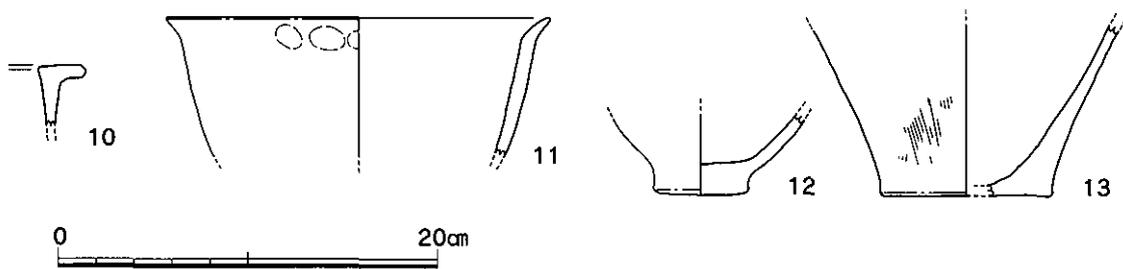
発掘区中央北寄り、SK01の南西約5.5mで検出されたもので、一部がくぼむ不整楕円形を呈している。最も長い部分で1.85m、幅1.1mを測る。床面はおおむね平坦で、深さ約15cmと浅い。ピットが3口検出されたが、北側の2口は深さ約20～30cm、中央の1口は7cmである。

#### 出土遺物(第24図)

床面から図版8に示すように弥生土器片が出土している。しかし、小破片のみである。11は甕



第23図 Ⅱ次土坑出土土器実測図① (1/4)

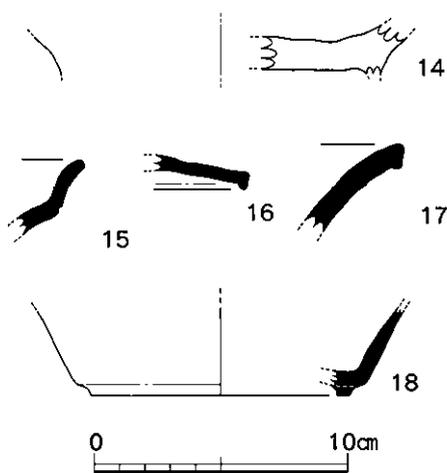


第24図 Ⅱ次土坑出土土器実測図② (1/4)

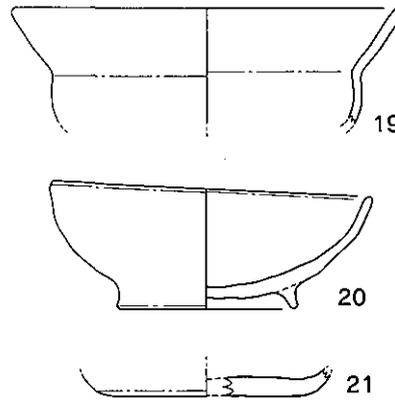
あるいは鉢で口縁部の作りが薄い。12は壺底部であるが、円盤状を呈している。13は甕底部である。いずれも摩滅のため調整がわかりにくい。

その他の土坑出土遺物 (第25・27図、図版13・14)

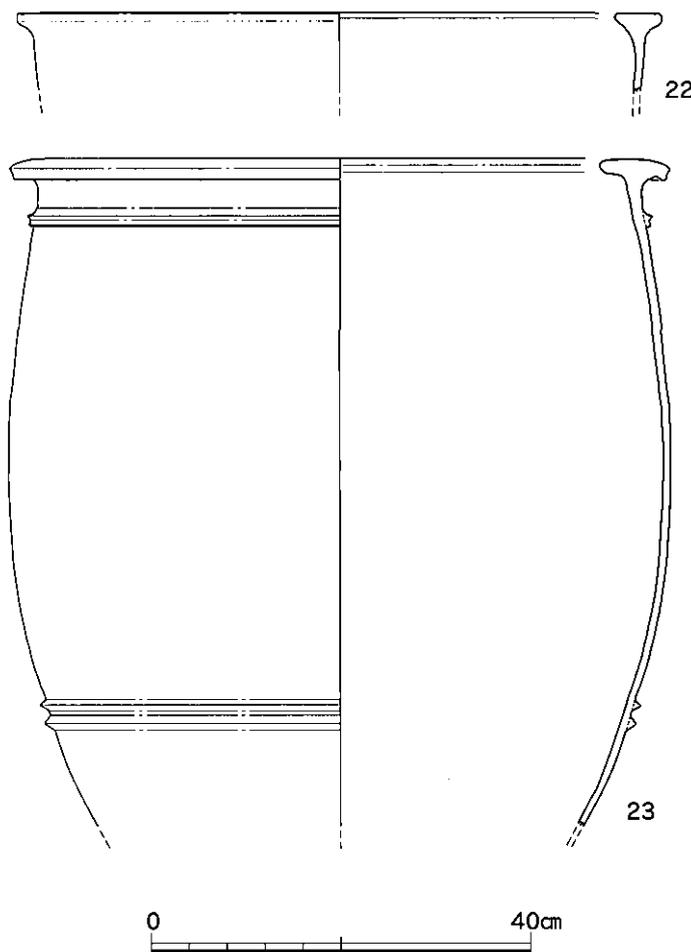
土器 第25図14はSK10出土で、須恵器のようであるが、よくわからない。高台を持つ底部で



第25図 Ⅱ次土坑出土土器実測図③ (1/3)



ある。15はS K 18出土で須恵器甕の口縁部であろう。16はS K 45出土で杯蓋の小破片である。17はS K 210出土で壺の口縁部と思われる。18はS K 168出土の杯身で高台の付くものである。19はS K 138出土の土師器小



第26図 Ⅱ次甕棺 (K 2) 実測図 (1/8)

型丸底壺の破片で口縁部径が胴部径より大きいものである。20はS K 164出土の土師器椀で、完形に近い。21はS K 197出土の土師器小皿で底部に糸切り痕が残る。

**石製品** 第27図1はS K 96出土の石鏃で黒曜石製である。刃部は鋸齒状に作る。小さいが優品である。長さ2.1cm、重さ0.4gを測る。2はS K 124出土の紡錘車で滑石製である。直径6.1cmを測る。3はS K 220出土の挟り入り片刃石斧の破片である。4はS K 32出土の砥石である。

### iii. 甕棺墓

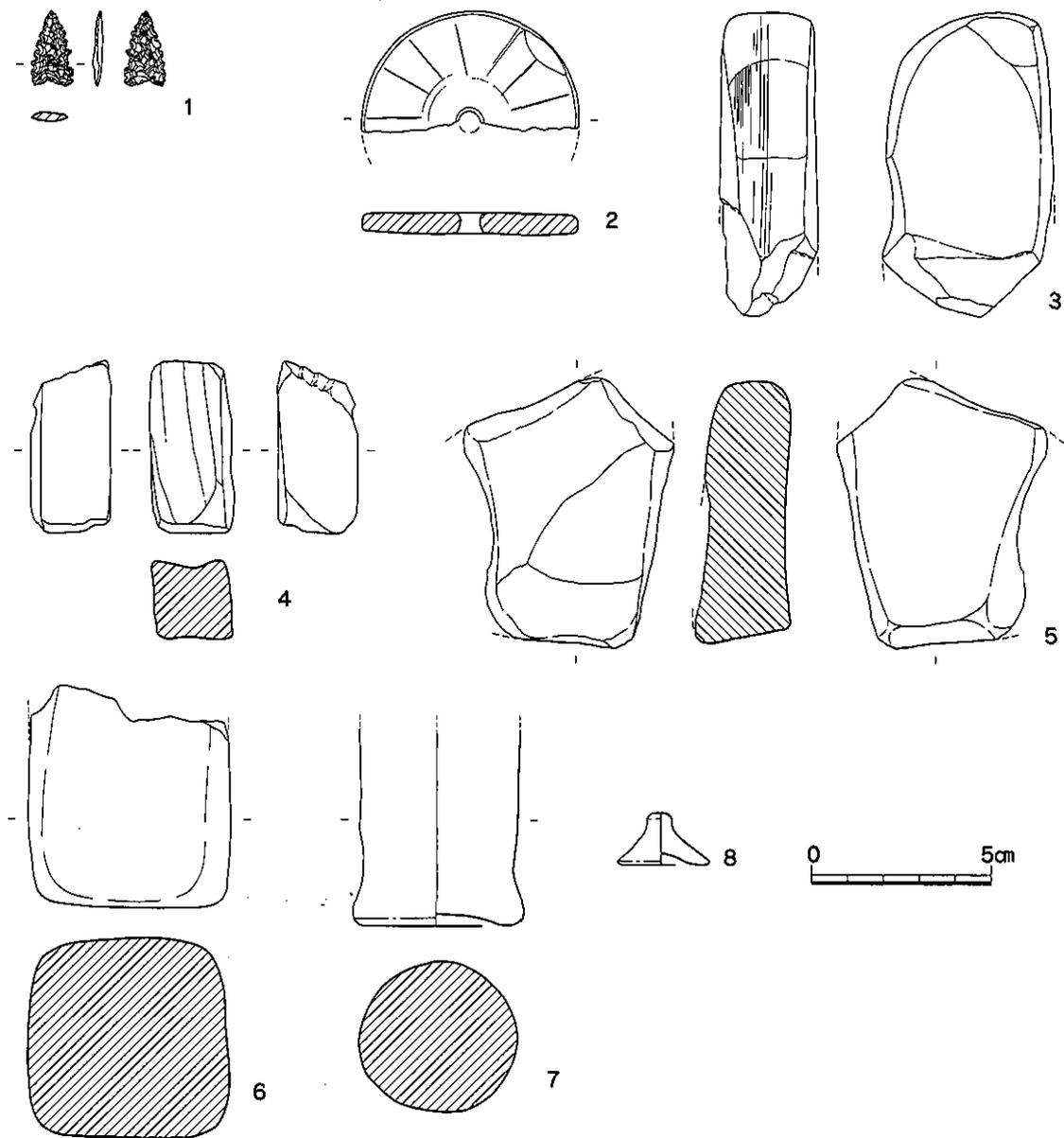
#### K 2 (第22図、図版9-(2))

発掘区東南部で単独で検出されたもので、かなり削平され、かろうじて最下部が残る状態であった。下甕の一部と上甕の口縁部の一部が残るだけであったが、接口式で、傾斜角度はかなり

ゆるやかだったと推定できる。

#### 出土遺物 (第26図、図版16)

上甕・下甕ともに甕を使用している。上甕は残りが悪く口縁部を残すのみであるが、T字形を呈す。下甕は同じくT字形の口縁部を持ち、胴部はやや丸みを帯び、口縁部下にM字形、胴部やや下部に2条の山形の突帯を持つ。



第27図 II次.石器・土製品実測図(1/2)

## IV. まとめ

### I次調査

I次調査では、用途の明らかなものは甕棺墓だけと言っても過言ではないが、土坑が多く検出されたことが大きな特徴と言える。形の整ったもの、整わないものの違いがあるが、SKとしたもの11基、SXとしたもの9基である。これらは遺構検出の際の状況から分けたものであるが、掘りあげた結果からすれば、適当ではないものもあった。そこで、用途を検討するため形態的に分類を行った。平面形がおおむね長方形を呈するものをa類、おおむね円形を呈するものをb類、楕円形を呈するものをc類、それらには入らないが形の整ったものをd類、完全に不整形のものをe類とし、

さらに二段掘り状ではないものを1類、二段掘り状のものを2類と細分すると、

a-1類.平面形はおおむね長方形で二段掘り状ではないもの—SK01・02、SX03・05

a-2類.平面形はおおむね長方形で二段掘り状のもの—SK03

b-1類.平面形がおおむね円形で二段掘り状ではないもの—SK09

b-2類.平面形がおおむね円形で二段掘り状のもの—SK10、SX07

c-1類.平面形が楕円形で二段掘り状ではないもの—SK11

c-2類.平面形が楕円形で二段掘り状のもの—SK07、SX06

d-1類.その他の形だが形が整っており二段掘り状ではないもの—SK06・08、SX02

e類. 不整形のもの—SK04・05、SX01・04・08・09

と分けることが可能である。このうち、二段掘り状でないものa-1、b-1、c-1類は貯蔵穴と考えて良いものと思われる。d-1類にしたSX02はほぼ長方形を呈し、規模が大きければ住居跡として良いものであるが、大きさからそうとは考えられないものである。

時期は、遺物が埋土中から出土していることから、遺構そのものの時期を断定することはできないとしても、ほとんどが弥生時代中期初頭の城ノ越式の土器であることから、その時期と考える。

溝SD01・02からも弥生時代中期前半の土器が出土しているが、SD02からはIVB期の須恵器杯蓋も出土している。浅い遺構であることから、時期は決定しにくい。

甕棺墓K1は口縁下に突帯を持つ特徴などから弥生時代中期中頃～後半にかけてのもので、橋口氏編年のKⅢa式に当たるものである。

その他、P126からは5世紀前半頃と考えられる土師器高杯、SK01・09からは縄文時代のものと考えられる石匙が出土している。

## 2. II 次調査

II次調査では竪穴住居跡1基、甕棺墓1基、またここでも多くの土坑が検出された。1号竪穴住居跡は出土遺物は少ないが、弥生時代中期前半と考えられる。

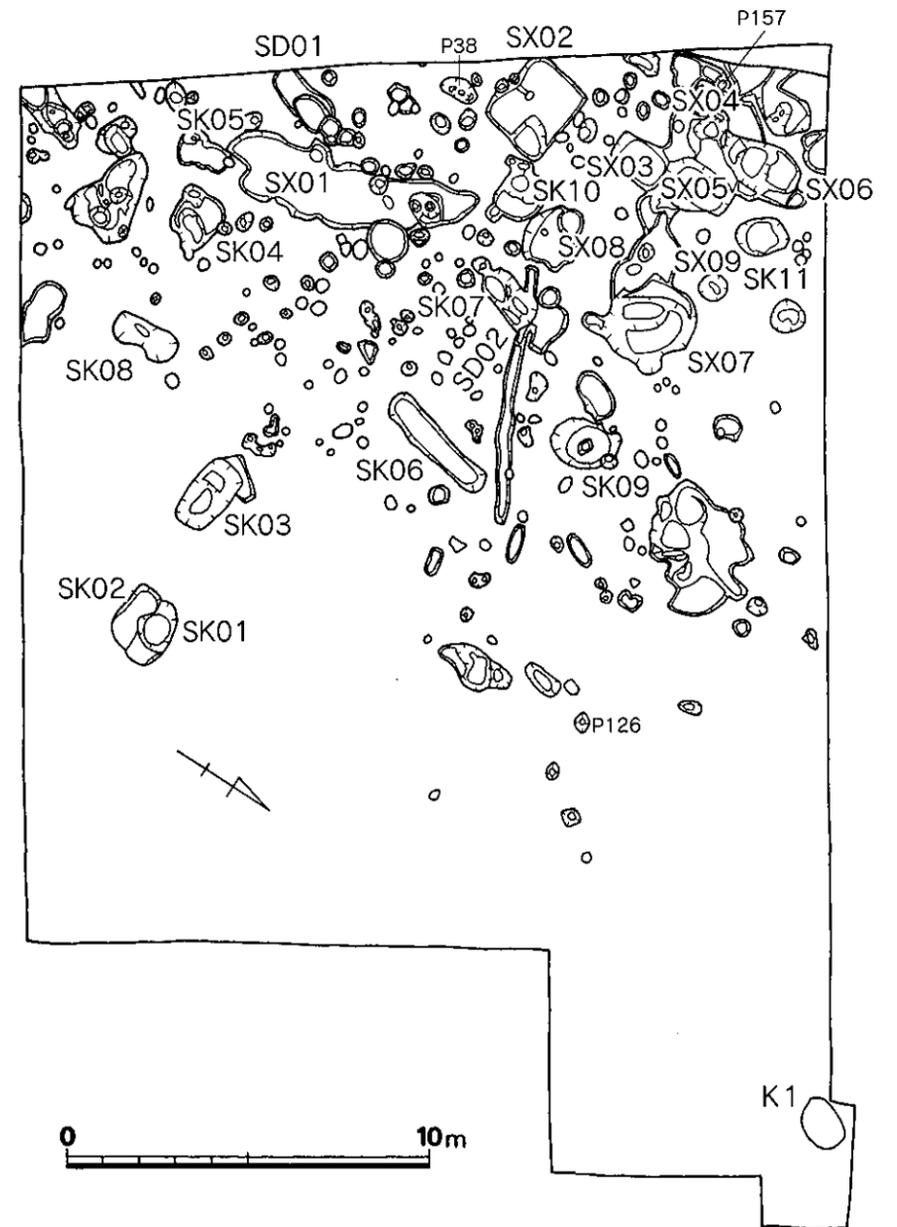
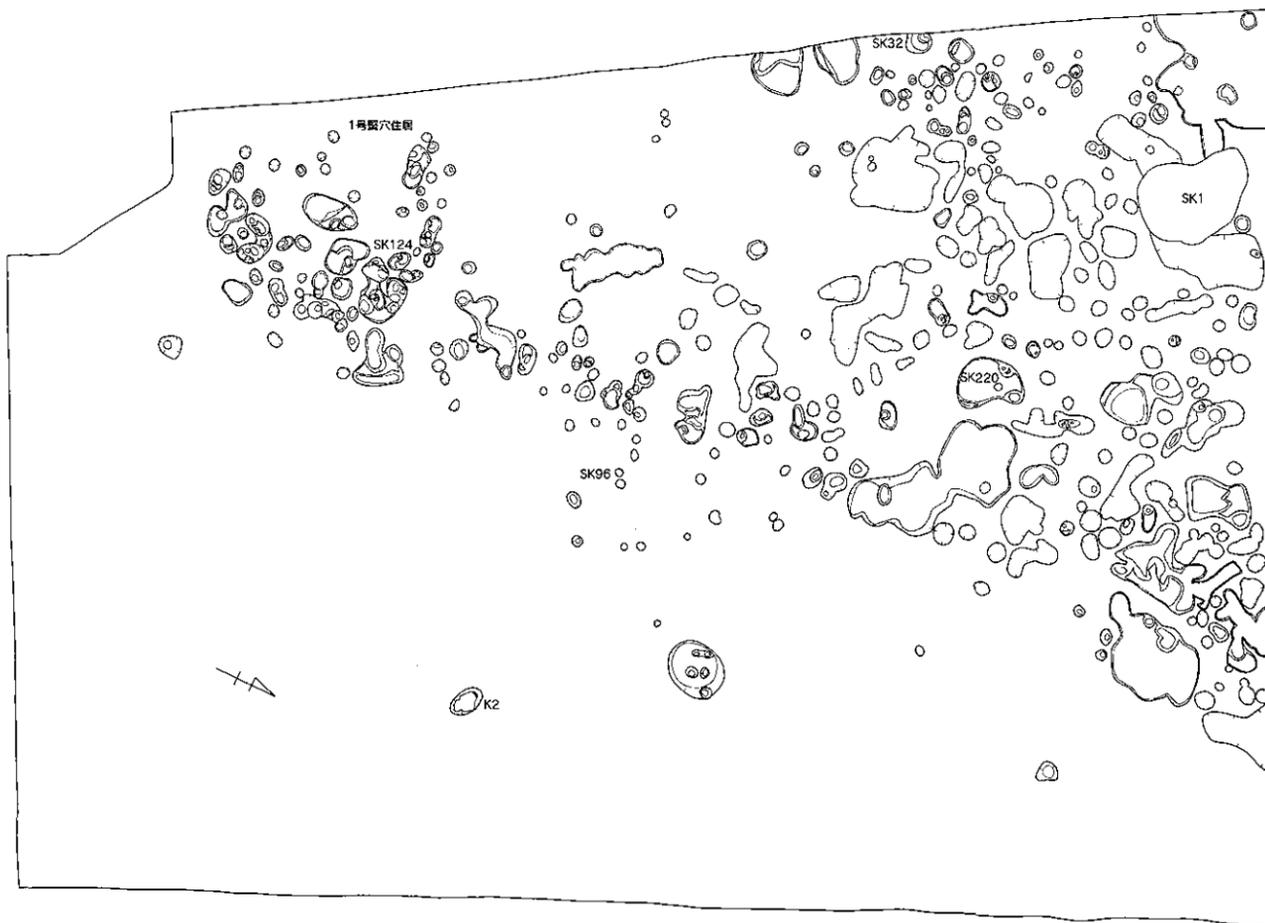
土坑はSK01が貯蔵穴と推定できるが、その他の多くは形態的に明確ではなく、また削平のため非常に浅く用途について断定できない。出土土器は弥生時代中期初頭の城ノ越式のものである。

甕棺墓K2は橋口氏編年のKⅢa式に当たるが、K1より口縁下がすばまって丸みを帯び、胴部の突帯もやや下位に下がる特徴などから、K1に後出するものであろう。

その他、ここでは第25図に示したとおり、19のような古式土師器、15・17のような6世紀末～7世紀初め頃と思われるIV期に属す須恵器、16・18のような奈良時代後半の須恵器、20のような平安時代10世紀頃と考えられる土師器なども出土している。

以上2回の発掘調査の結果、中・寺尾遺跡に近い南東側には中期中頃から後半の甕棺墓群があったことが想定でき、北西側には中期前半の集落域があったことがわかった。また、弥生時代以外の遺物も出土したことから、今後周辺の発掘調査の際は当該時期の遺構にも注意を払う必要がある。

<註1> 橋口達也「IV-4. 甕棺の編年的研究」【九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI】福岡県教育委員会 1979



第28図 I・II次調査遺構配置図 (1/200)

## ヒケシマ遺跡遺物観察表 (I次調査)

※ 法量の( )は復元値

図番号	種類	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高 ③底径(高台径)	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成	C色調		D残存	備考
							内面	外面		
8-1	弥生土器	甕	SK01	①19.2~20.15 ②8.6+8.4+ $\alpha$	外面はハケメ 内面はナデ 口縁はヨコナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	明褐色(7.5YR5/6) 黒褐色(10YR3/2) 灰黄褐色(10YR5/2)	黒褐色(7.5YR3/2) にぶい褐色(7.5YR5/3) 橙色(5YR7/6)	体部中位・ 底部欠損	
8-2	弥生土器	甕	SK03	②5.7+ $\alpha$ ③10.0	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 不良	黒褐色(10YR3/2)	橙色(5YR7/6) にぶい黄褐色(10YR7/2)	底部のみ	
8-3	弥生土器	甕	SK04	②5.1+ $\alpha$ ③6.55	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 不良	灰黄褐色(10YR5/2)	明赤褐色(5YR5/6) 灰褐色(7.5YR5/2)	底部のみ	
8-4	弥生土器	壺	SK04	②3.0+ $\alpha$	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 良	明赤褐色(2.5YR5/6) 橙色(7.5YR6/6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁破片	
8-5	弥生土器	甕	SK05	②5.65+ $\alpha$	外面は磨耗のため不明 内面はナデ	A 砂粒を多く含む B 不良	橙色(5YR7/6) 灰褐色(7.5YR5/2)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	口縁~体部 上位破片	
8-6	弥生土器	壺	SK06	①(20.0) ②5.9+ $\alpha$	外面はハケメ後ナデ 内面はミガキか?	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良	褐灰色(5YR5/1)	橙色(5YR6/6)	口縁~頸部 1/8	
8-7	弥生土器	甕	SK06	①22.9 ②11.0+ $\alpha$	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	明赤褐色(5YR5/8) にぶい黄褐色(10YR6/3)	明赤褐色(5YR5/8) にぶい黄褐色(10YR6/3)	口縁~体部 中位	
8-8	弥生土器	甕	SK06	①(31.6) ②12.2+ $\alpha$	口縁と突帯接合部はヨコナデ 他は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 赤褐色粒を含む B やや不良	灰黄褐色(10YR6/2)	にぶい橙色(5YR6/4)	口縁~体部 上位1/7	
8-9	弥生土器	壺?	SK06	②4.7+ $\alpha$ ③(10.7)	外面はハケメ後ナデ 内面はナデ 底部裏面はナデ	A 砂粒を多く含む B やや良好	にぶい褐色(7.5YR7/4) にぶい黄褐色(10YR7/3)	橙色(7.5YR6/6)	底部のみ	
8-10	弥生土器	甕	SK06	②7.3+ $\alpha$ ③6.5	外面はハケメ 内面はナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	灰褐色(7.5YR4/2)	明赤褐色(2.5YR5/8)	底部のみ	
8-11	弥生土器	甕	SK07	①(27.3) ②9.3+ $\alpha$	内外面共にナデ 口縁、突帯接合部はヨコナデ 口縁下に工具痕あり	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良	にぶい黄褐色(10YR7/2)	褐色(7.5YR7/6) 褐灰色(7.5YR6/1)	口縁~体部 上位1/8	
8-12	弥生土器	甕	SK07	②9.55+ $\alpha$ ③9.3	外面は磨耗のため不明 内面はナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	にぶい黄褐色(10YR7/2)	にぶい黄褐色(10YR7/2) 明褐色(7.5YR5/6)	体部下位 (一部)~ 底部	
8-13	弥生土器	甕	SK08	②7.2+ $\alpha$ ③7.2	外面はハケメ 内面は指頭匠後ナデ 底部裏面はナデ	A 砂粒を多く含む B 良	明赤褐色(5YR5/6)	褐色(7.5YR6/6) 灰黄色(7.5Y7/2)	底部3/4	
8-14	弥生土器	甕	SK08	②5.0+ $\alpha$ ③7.4	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B やや不良	赤灰色(2.5YR4/1)	褐色(5YR6/8) にぶい褐色(7.5YR7/4)	底部のみ	
8-15	弥生土器	甕	SK09	①(30.6) ②6.6+ $\alpha$	外面はハケメ 内面はナデ 口縁はヨコナデ	A 砂粒を多く含む 黒褐色粒を含む B 良	明赤褐色(2.5YR5/8)	褐色(5YR6/6)	口縁1/8	
8-16	弥生土器	甕	SK09	②11.7+ $\alpha$ ③8.1	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	褐色(2.5YR6/6) にぶい褐色(7.5YR7/3)	赤褐色(10R6/8) 褐色(2.5YR6/6)	体部下位~ 底部	
10-17	弥生土器	甕	SK10	②9.0+ $\alpha$ ③6.9	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明 底部裏面はナデ	A 砂粒を多く含む B 良	褐灰色(7.5YR4/1)	褐灰色(7.5YR6/1) 褐色(5YR6/8)	体部下位~ 底部	
10-18	弥生土器	甕	SK10	②5.4+ $\alpha$ ③6.9	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	にぶい黄褐色(10YR6/4)	褐色(5YR6/6)	体部下位 (一部)~ 底部	
10-19	弥生土器	甕	SK11	①(19.6) ②11.0+ $\alpha$	外面はハケメ後工具による ナデか? 口縁はヨコナデ 内面はナデ 胴部に沈線を施す	A 砂粒を多く含む 角閃石を含む B やや良好	褐色(7.5YR4/6) にぶい褐色(7.5YR6/4) 灰黄褐色(10YR5/2)	褐色(7.5YR4/3) 灰褐色(7.5YR4/2)	口縁~体部 中位1/6	
10-20	弥生土器	甕	SK11	①(21.6) ②18.5+ $\alpha$	外面はハケメ後工具によるナデ か? 内面はナデ 口縁はヨコ ナデ 口縁下に指頭痕あり 口縁部にキザ、胴部に沈線を施す	A 砂粒を多く含む B やや不良	褐灰色(10YR4/1) 褐色(5YR6/6)	明赤褐色(5YR5/6) 黒褐色(10YR3/2)	口縁~体部 中位1/4	
10-21	弥生土器	甕	SK11	②13.2+ $\alpha$ ③8.5	外面に工具痕あり 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	にぶい黄褐色(10YR7/2) 灰褐色(7.5YR4/2)	褐色(2.5YR6/6) 褐色(7.5YR6/6)	体部下位 (一部)~ 底部	
10-22	弥生土器	甕	SK11	②16.9+ $\alpha$ ③9.3	外面は磨耗のため不明 内面はナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	にぶい褐色(7.5YR5/4) 灰黄褐色(10YR5/2)	褐色(2.5YR6/8) 褐色(5YR7/8)	体部下位~ 底部	
14-23	弥生土器	甕	SX02	①(23.4) ②6.0+ $\alpha$	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	にぶい黄褐色(10YR7/3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	口縁~体部 上位1/8	
14-24	弥生土器	甕	SX02	①(22.6) ②4.6+ $\alpha$	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	浅黄褐色(10YR8/3) にぶい褐色(7.5YR7/4)	褐色(7.5YR7/6)	口縁1/6	
14-25	弥生土器	甕	SX03	②8.1+ $\alpha$ ③(9.6)	外面は磨耗のため不明 内面はナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	褐灰色(5YR4/1) 灰黄褐色(10YR6/2)	褐色(2.5YR6/6) 浅黄褐色(7.5YR8/4) 褐色(7.5YR7/6)	底部1/2	
14-26	弥生土器	甕	SX03	②8.35+ $\alpha$ ③8.0	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 不良	にぶい黄褐色(10YR7/3)	浅黄褐色(7.5YR8/6) 褐色(7.5YR6/6)	底部のみ	

## ヒケシマ遺跡遺物観察表 (I次調査)

※ 法量の ( ) は復元値

図番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③底径(高台径)	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成	C色調		D残存	備考
							内面	外面		
14-27	弥生土器	壺	SX04	①26.0 ②6.7+α	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 赤褐色粒を含む B 不良	にぶい黄褐色(10YR7/3) 褐色(5YR6/6)	褐色(7.5YR6/6)	口縁~頸部	
14-28	弥生土器	甕	SX04	①(25.8) ②22.7+α	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明 口縁はヨコナデ 胴部に沈線を施す	A 砂粒を多く含む 赤褐色粒を含む B やや不良	浅黄褐色(7.5YR8/4) にぶい黄褐色(10YR5/3)	浅黄褐色(10YR8/3) 褐色(7.5YR7/6)	底部・口縁~ 体部下位 1/4欠損	
14-29	弥生土器	甕	SX05(下)	①19.75 ②8.2+α	外面は磨耗のため不明 内面はナデ 口縁はヨコナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	灰白色(10YR8/2) 灰黄褐色(10YR4/2)	灰黄褐色(10YR6/2) 灰黄褐色(10YR4/2)	口縁~体部 上位	
14-30	弥生土器	甕	SX05(下)	②4.1+α ③5.0	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 不良	にぶい褐色(7.5YR6/3)	褐色(2.5YR6/6)	底部のみ	
14-31	弥生土器	壺	SX05(上) +06	①(25.2) ②5.0+α	外面はナデ 口縁はヨコナデ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	褐色(7.5YR6/8)	灰褐色(7.5YR6/2)	口縁1/4	
14-32	弥生土器	壺	SX05(上) +06	①(25.3) ②9.3+α	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 赤褐色粒を含む B 不良	にぶい黄褐色(10YR7/3)	褐色(5YR6/8)	口縁~頸部 1/2	
14-33	弥生土器	器台	SX05(上) +06	②15.15 最大径8.7 最小径6.7	外面は指頭庄 内面はナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良		にぶい褐色(7.5YR6/4) 褐色(2.5YR6/8)	ほぼ完形	
14-34	弥生土器	甕	SX07	①24.8 ②15.65+α	外面はハケメ 内面はナデ 口縁はヨコナデ 胴部に沈線を施す	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良	赤褐色(10R6/8)	褐色(2.5YR6/8) 灰褐色(7.5YR6/2)	口縁~体部 中位	
14-35	弥生土器	甕	SX07	②9.3+α ③10.0	外面はハケメ 内面はナデ 底部表面はナデ	A 砂粒を多く含む B 良	褐灰色(10YR4/1)	褐色(7.5YR7/6)	体部下位~ 底部	
14-36	弥生土器	甕	SX08	②7.5+α	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 不良	褐色(2.5YR6/8)	赤褐色(10R6/6)	口縁~体部 上位破片	
14-37	弥生土器	甕	SX09	①(24.8) ②8.5+α	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 良	灰黄褐色(10YR6/2)	明赤褐色(5YR5/8) 褐灰色(7.5YR4/1)	口縁~体部 上位1/7	
14-38	弥生土器	甕	SX09	①(47.0) ②6.6+α	内外面共にナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良	灰黄褐色(10YR5/2)	灰黄褐色(10YR5/2)	口縁1/8	
15-39	弥生土器	壺	SD01	①(28.4) ②8.3+α	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 不良	赤褐色(10R5/4) にぶい黄褐色(10YR7/3)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	口縁~頸部 1/4	
15-40	弥生土器	壺	SD01	①(29.0) ②8.8+α	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 不良	褐色(5YR6/6) にぶい黄褐色(10YR7/3) 灰黄褐色(10YR6/2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	口縁~頸部 1/4	
15-41	弥生土器	鉢?	SD01	①(8.4) ②4.1+α	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 不良	灰色(N4/)	灰色(5Y5/1)	口縁~体部 1/3	
15-42	弥生土器	甕	SD01	②5.2+α ③7.8	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	にぶい褐色(7.5YR6/4) 褐色(5YR6/6)	明赤褐色(2.5YR5/6) 褐色(5YR6/6)	底部のみ	
15-43	弥生土器	甕	SD02	②5.7+α ③7.4	外面は磨耗のため不明 内面はナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	にぶい褐色(7.5YR6/3)	褐色(5YR6/6) 褐色(7.5YR7/6)	底部のみ	
15-44	弥生土器	甕	SD02	②5.1+α	外面はヨコナデ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	浅黄褐色(7.5YR8/6)	浅黄褐色(10YR8/3)	口縁破片	
15-45	須恵器	杯蓋	SD02	①(11.1) ②2.85	磨耗のため不明	A 砂粒を含む B やや不良	褐色(7.5YR6/6)	褐色(7.5YR6/6)	1/2残 口縁 端部欠損	
16-46	弥生土器	甕	P1	②4.2+α ③6.85	外面は磨耗のため不明 内面はナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	褐灰色(7.5YR4/1)	褐色(5YR6/8)	底部のみ	
16-47	弥生土器	壺	P30	①(25.8) ②10.8+α	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B やや不良	褐色(7.5YR7/6) 褐灰色(10YR6/1)	褐色(7.5YR7/6)	口縁~頸部 1/4	
16-48	弥生土器	甕	P46	①(30.9) ②7.8+α	内外面共にナデ 口縁、突帯接合部はヨコナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	灰白色(2.5Y7/1)	褐色(5YR6/8)	口縁~体部 上位1/8	
16-49	弥生土器	甕	P93	②5.6+α ③8.3	外面はハケメ 内面はナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B やや不良	褐灰色(10YR4/1)	明褐灰色(7.5YR7/2) 褐色(7.5YR6/6)	底部のみ	
16-50	弥生土器	甕	P107	②7.95+α ③(7.4)	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B やや不良	にぶい黄褐色(10YR7/3)	褐色(2.5YR6/8)	底部1/2	
16-51	土師器	高杯 杯部	P126	①(20.4) ②7.35+α 孔径1.15	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明 底面の孔に粘土を詰めた痕跡あり	A 砂粒を多く含む 角閃石を含む B やや不良	灰黄色(2.5Y7/2) 明黄褐色(10YR6/6)	褐灰色(10YR5/1) にぶい黄褐色(10YR7/4)	杯部口縁 2/3欠損	
16-52	弥生土器	甕	P136 +167	①(18.4) ②13.0+α	外面はハケメ 内面はナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B やや不良	褐色(5YR6/6) 褐灰色(7.5YR4/1)	明褐色(7.5YR5/6)	口縁~体部 中位1/3	

## ヒケシマ遺跡遺物観察表 (I次調査)

※ 法量の( )は復元値

図番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③底径(高台径)	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成	C色調		D残存	備考
							内面	外面		
16-53	弥生土器	壺	P156	②15.9+ $\alpha$ ③7.7	内外面共にナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	灰黄褐色(10YR6/2) にぶい橙色(7.5YR6/4)	灰黄褐色(10YR6/2) にぶい橙色(7.5YR6/4)	体部下位~ 底部	
16-54	弥生土器	甕	P160	①(44.8) ②9.95+ $\alpha$	外面は磨耗のため不明 内面はナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良	にぶい橙色(7.5YR7/4)	橙色(5YR6/6)	口縁~体部 上位1/7	
16-55	弥生土器	甕	P164	②4.3+ $\alpha$ ③6.0	外面はハケメ 内面は指頭圧後ナデ	A 砂粒を多く含む B 良	橙色(7.5YR6/6)	赤色(10R5/8)	底部3/4	
18-56	弥生土器	甕棺(上甕)	K1号	①(75.0) ②33.3+ $\alpha$	外面は磨耗のため不明 内面はナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁~胴部3/2 底部欠損	
18-57	弥生土器	甕棺(下甕)	K1号	①(72.4) ②107.7 ③13.7	内外面共にナデ 口縁、突帯接合部はヨコナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	口縁~胴部 中位1/2 胴部下位~ 底部	胴部下位~底部 胴部に赤色 (10R5/6)の顔料? が残る
19-1	石器	石匙	SK09	最長7.7 最大幅 3.25 最大厚0.9 重量17.2g		-			ほぼ完形	サヌカイ
19-2	石器	石匙	SX01	最長7.1 最大幅 2.7 最大厚1.1 重量16.8g		-			完形	サヌカイ
19-3	石器	石鎌	SK10	最長7.9 最大幅 3.75 最大厚1.1 重量41.4g		-		あずき色		
19-4	石器	紡錘車	SX09	径3.9+ $\alpha$ 最大厚 0.6 重量15.0g 孔径0.9		-			側縁部分 欠損	滑石
19-5	石器	紡錘車	SX08	径4.1 最大厚0.6 重量15.6g 孔径0.95		-			ほぼ完形	滑石
19-6	土製品	投弾	P38	最長3.7 最大幅2.0 最大厚1.85 重量10.7g		A 砂粒を多く含む B 良		にぶい黄橙色(10YR7/3) 褐灰色(10YR6/1)	完形	
19-7	石器	石包丁?	SK09	最長5.35 最大幅 1.95 最大厚0.3 重量5.2g 孔径0.4		-				
19-8	土製品	支脚	P157	②7.25+ $\alpha$ 最大径5.1	ナデ	A 砂粒を多く含む B 良		にぶい黄橙色(10YR7/4) 橙色(2.5YR6/8)		
19-9	石器	磨製石斧	SX09	最長7.25 最大幅 6.3 最大厚4.3 重量258.4g		-				
19-10	石器	砥石?	SK06	最長10.3 最大幅 8.95 最大厚7.7 重量932.0g		-				赤い部分が多く 見られる

## ヒケシマ遺跡遺物観察表 (Ⅱ次調査)

※ 法量の( )は復元値

図番号	種類	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高 ③底径(高台径)	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成	C色調		D残存	備考
							内面	外面		
23-1	弥生土器	甕	SK01	①(26.9) ②18.4+α	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 赤褐色粒を含む B やや不良	にぶい橙色(7.5YR7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/2) 浅黄褐色(7.5YR8/6) 黒褐色(10YR3/2)	口縁~体部 中位	
23-2	弥生土器	甕	SK01	①(25.5) ②30.0 ③7.6	外面はハケメ 内面はナデ 口縁はヨコナデ	A 砂粒を多く含む B やや良好	橙色(5YR7/6) にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR6/4) 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁~体部 中位1/4欠損	
23-3	弥生土器	甕	SK01	①26.3 ②8.8+α	外面はハケメ 内面はナデ 口縁はヨコナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B やや不良	橙色(2.5YR6/6)~にぶい 黄褐色(10YR7/2) 灰黄褐色(10YR5/2)	にぶい黄褐色(10YR7/2) にぶい黄褐色(10YR6/3) にぶい橙色(7.5YR6/4)	口縁~体部 上位	
23-4	弥生土器	甕	SK01	②9.8+α ③7.35	外面はハケメ 内面は磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 雲母、赤褐色 粒を含む B やや不良	にぶい橙色(7.5YR7/4)	橙色(7.5YR6/6) にぶい褐色(7.5YR5/4)	体部下位~ 底部	
23-5	弥生土器	甕	SK01	②9.5+α ③7.65	外面はハケメ 内面はナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B やや不良	褐灰色(7.5YR5/1)	明赤褐色(2.5YR5/6)	体部下位~ 底部	
23-6	弥生土器	甕	SK01	②8.3+α ③7.4	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む B 不良	褐灰色(7.5YR4/1)	橙色(2.5YR6/6) 橙色(5YR7/6)	底部のみ	
23-7	弥生土器	小型壺	SK01	①14.9 ②5.1+α	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 不良	灰白色(10YR8/2)	浅黄褐色(7.5YR8/4) 橙色(7.5YR7/6)	口縁~頸部	
23-8	弥生土器	壺	SK01	①19.4 ②7.4+α	外面は磨耗のため不明 内面は横方向のハケメ後ナデ	A 砂粒を多く含む 赤褐色粒を含む B 不良	橙色(5YR7/6) 灰白色(10YR8/1)	灰黄褐色(10YR6/2) 橙色(5YR7/6)	口縁~頸部	
23-9	弥生土器	壺	SK01	②5.5+α ③7.0	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 赤褐色粒を含む B 不良	灰白(10YR8/2) にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/2) 褐色(5YR6/8)	底部のみ	
24-10	弥生土器	甕	SK124	②3.2+α	外面はハケメ 内面はナデ 口縁はヨコナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B やや不良	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	口縁破片	
24-11	弥生土器	鉢	SK220	①(20.2) ②7.4+α	内外面共にナデ 外面口縁下に指頭痕あり 口縁はヨコナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 不良	橙色(2.5YR6/6) にぶい黄褐色(10YR7/2)	にぶい橙色(7.5YR7/4) にぶい黄褐色(10YR6/3)	口縁~体部 上位1/4	
24-12	弥生土器	壺	SK220	②4.3+α ③5.1	磨耗のため不明	A 砂粒を多く含む 赤褐色粒を含む B 不良	浅黄褐色(7.5YR8/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	底部のみ	
24-13	弥生土器	甕	SK220	②9.1+α ③(9.0)	外面はハケメ 内面はナデ	A 砂粒を多く含む B やや不良	黒褐色(10YR3/1) 灰黄褐色(10YR6/2)	褐色(5YR6/8)	体部下位 (一部)~ 底部1/2	
25-14	須恵器?	壺	SK10	②2.0+α	底部裏面はケズリ 内面はナデ	A 砂粒を微量に 含む B 良	明黄褐色(10YR6/6)	灰色(7.5Y6/1) 灰色(7.5Y4/1)	底部1/4残 高台欠損	
25-15	須恵器	甕	SK18	②3.0+α	内外面共に回転ナデ 外面に沈線を施す	A 砂粒を少量 含む B 良	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	灰色(10Y6/1)	口縁破片	
25-16	須恵器	蓋	SK45	②1.4+α	内外面共に回転ナデ	A 砂粒を少量 含む B 良	灰オリーブ色(5Y6/2) 灰色(N4/)	灰白色(2.5Y7/1)	口縁破片	
25-17	須恵器	壺?	SK210	②2.2+α	内外面共に回転ナデ	A 砂粒を少量 含む B やや不良	暗灰黄色(2.5Y4/2)	黒褐色(2.5Y3/1)	口縁破片	
25-18	須恵器	杯 (高台)	SK168	②3.5+α ③(10.2)	内外面共に回転ナデ 高台貼付の回転ナデ	A 砂粒を少量含む B 良	灰色(N6/)	灰色(5Y6/1)	体部中位~ 高台1/6	
25-19	土師器	小型 丸底甕	SK138	①(15.4) ②4.6+α	内外面共に回転ナデ	A 砂粒・角閃石を 多く含む B 不良	褐色(5YR6/6) にぶい黄褐色(10YR7/4)	明赤褐色(2.5YR5/6) にぶい橙色(7.5YR7/4)	口縁~体部 中位1/8	
25-20	土師器	碗	SK164	①12.8 ②5.1 ③7.1	内外面共に回転ナデ 底面はナデ 高台貼付の回転ナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B やや不良	浅黄褐色(10YR8/3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	ほぼ完形	
25-21	土師器	小皿	SK197	②1.1+α ③(7.6)	内外面共に回転ナデ 内底面はナデ 回転糸切離し 板状圧痕あり	A 砂粒を少量 含む B やや不良	にぶい黄褐色(10YR7/3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	1/4残 口縁 端部欠損	
26-22	弥生土器	甕棺 (上甕)	K02	①(65.8) ②8.6+α	内外面共にナデ 口縁はヨコナデ	A 砂粒を多く含む B やや良好	褐色(5YR6/6)	褐色(5YR6/6)	口縁1/8	
26-23	甕棺	甕棺 (下甕)	SJ02	①(69.4) ②71.0+α	内外面共にナデ	A 砂粒を多く含む 雲母を含む B 良	明赤褐色(2.5YR5/6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁~胴部 下位1/4	
27-1	石器	石鏃	SK96	最長2.1 最大幅 1.15 最大厚0.25 重量0.4g		-		完形	黒曜石	
27-2	石器	紡錘車	SK124	径6.1 最大厚0.6 重量22.8g 孔径0.6	放射状の沈線文を施す	-		1/2残	滑石	
27-3	石器	扶入 石斧	SK220	最長8.55 最大幅 4.8 最大厚2.7 重量196.8g		-				

## ヒケシマ遺跡遺物観察表（Ⅱ次調査）

※ 法量の( )は復元値

図番号	種類	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高 ③底径(高台径)	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成	C色調		D残存	備考
							内面	外面		
27-4	石器	砥石	SK32	最長4.85 最大幅 2.35 最大厚2.2 重量40g		-				
27-5	石器	砥石	SK01	最長7.6 最大幅 5.4 最大厚2.7 重量140.4g		-				
27-6	土師器	支脚	SK01	②6.25+a 最大径5.65	磨耗のため不明	A 砂粒を少量含む B やや不良		にぶい黄橙色(10YR7/3) 橙色(7.5YR6/6)		
27-7	土師器	支脚?	SK01	②5.5+a 最大径4.75	磨耗のため不明	A 砂粒を少量含む B やや不良		にぶい黄橙色(10YR7/3) 橙色(7.5YR7/6) にぶい黄褐色(10YR5/4)		
27-8	土師器	ミニ チュ ア蓋	SK01	①2.55 ②1.45 つまみ径0.6	磨耗のため不明	A 砂粒を微量に 含む B 不良	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	完形	

# 圖 版



(1) I次調査地全景



(2) I次.SK01・02



(1) I次.SK03



(2) I次.SK04



(1) I次.SK06



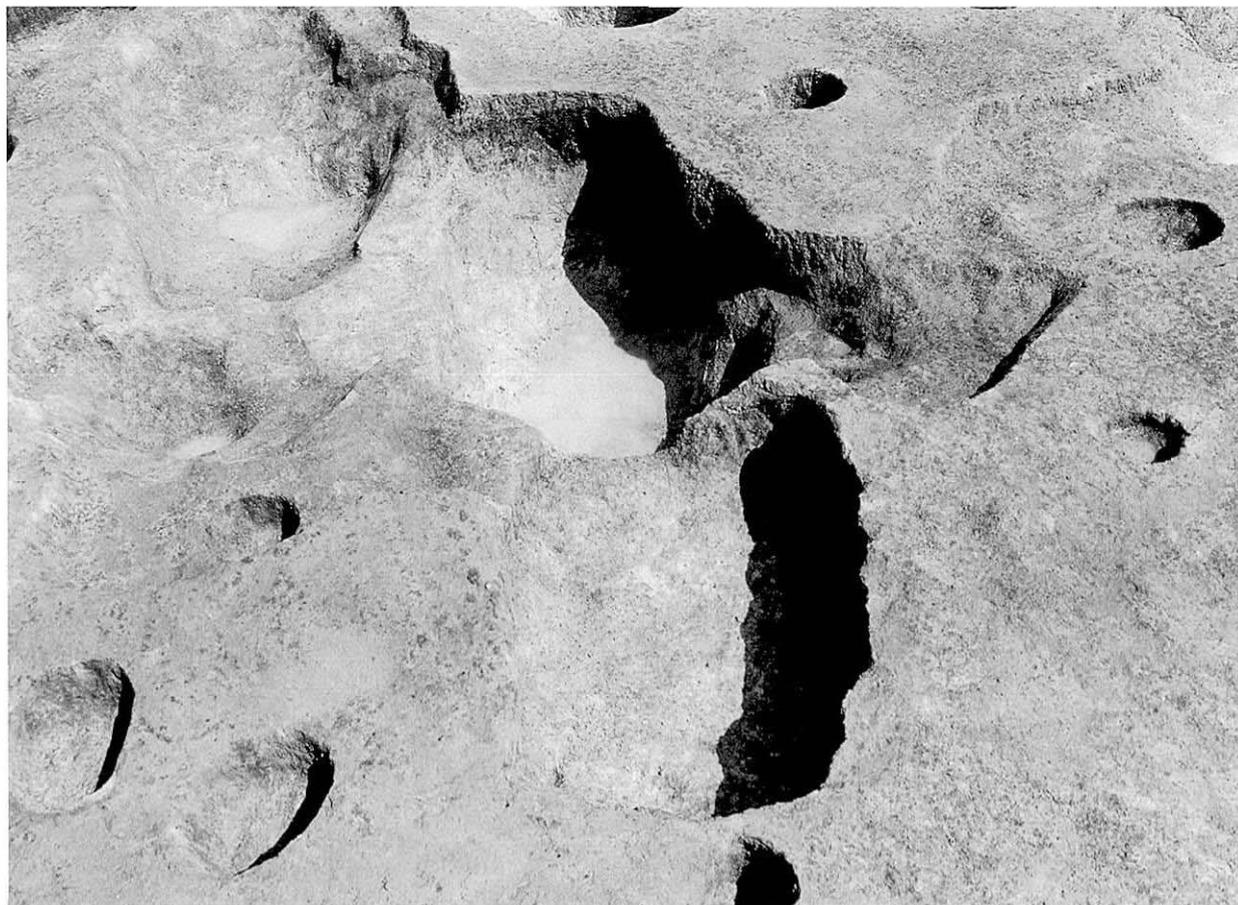
(2) I次.SK10



(1) I次.SX02



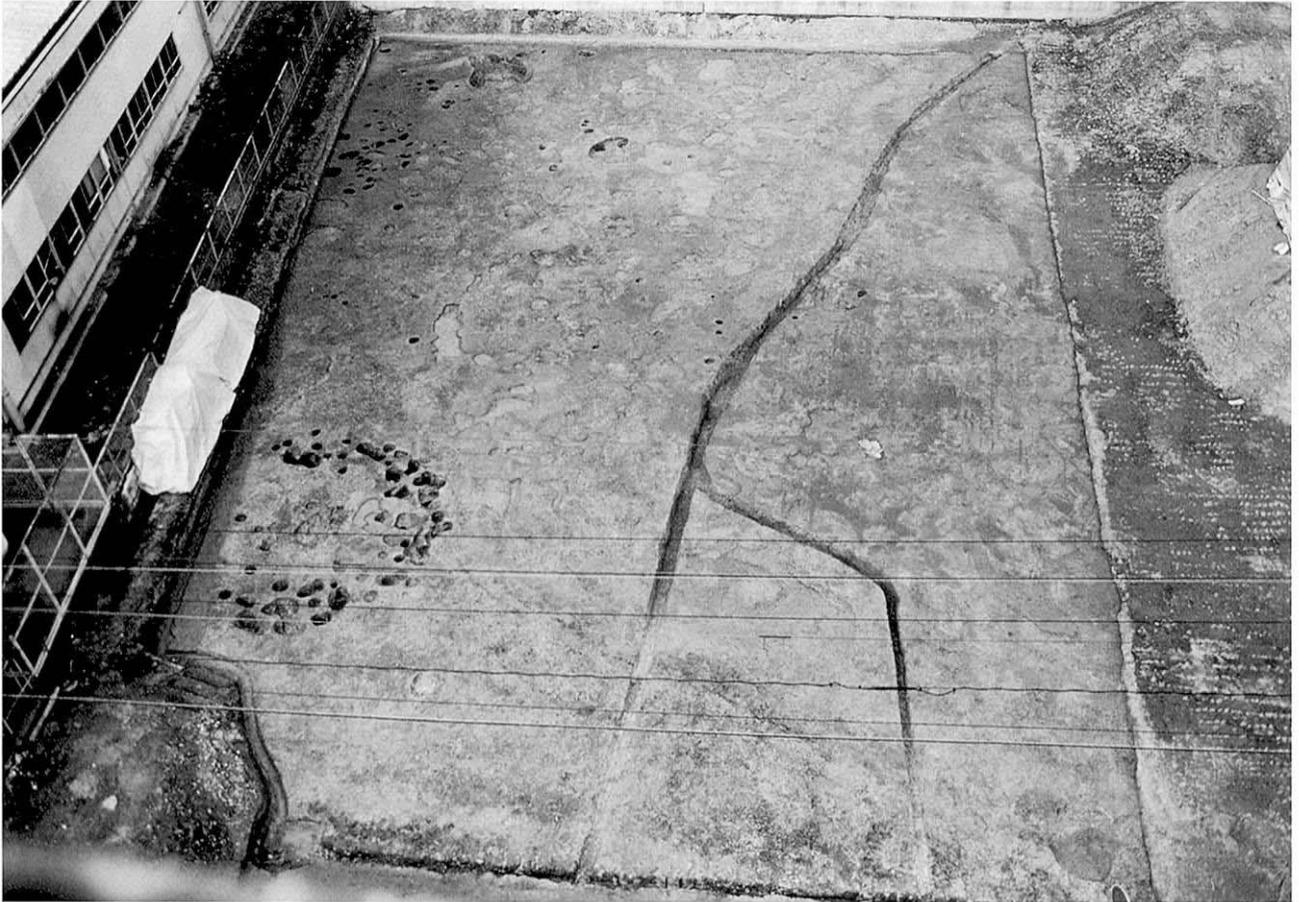
(2) I次.SX03~06



(1) I次.SX03~06



(2) I次.K1



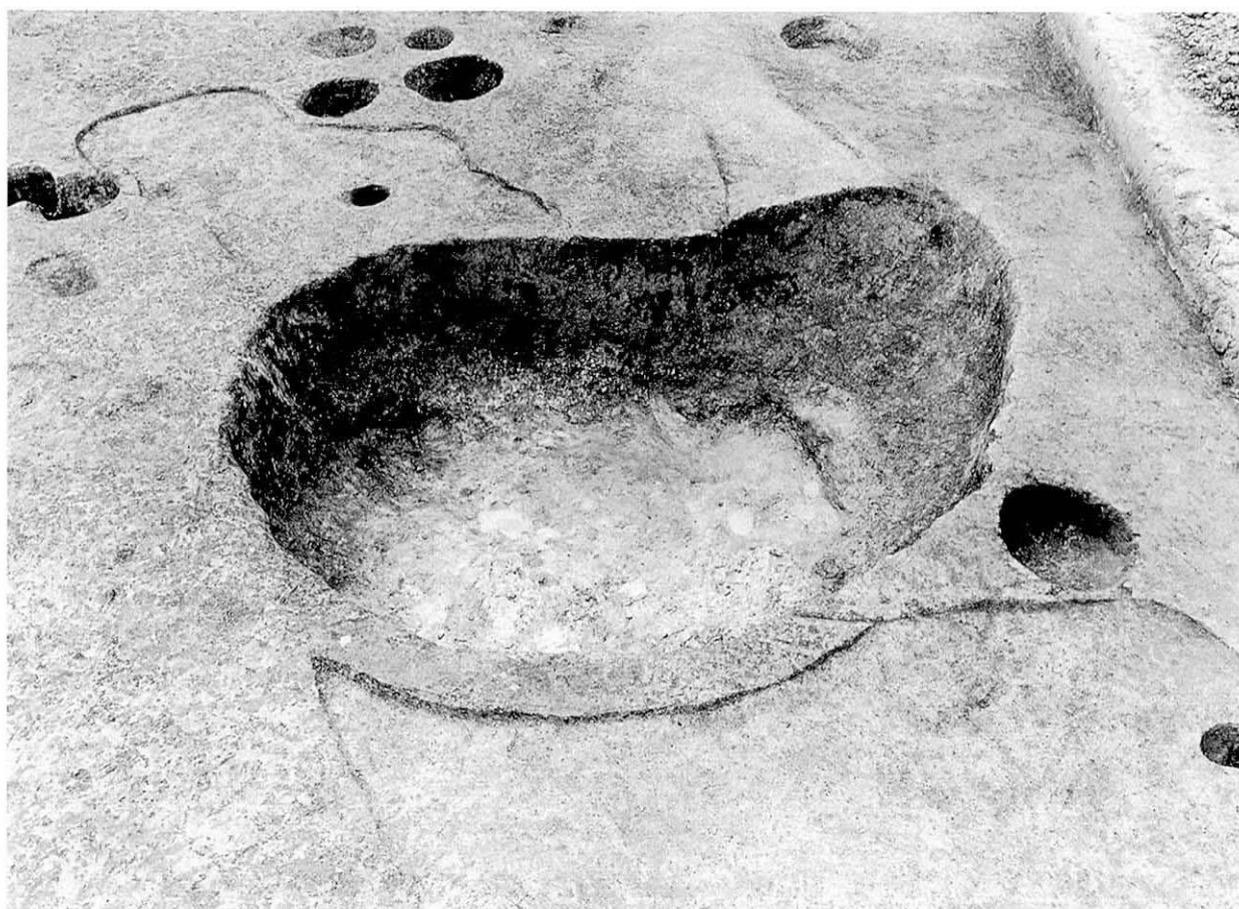
(1) II次調査地全景



(2) II次調査地全景



(1) II次.SK01



(2) II次.SK01



(1) Ⅱ次.SK220



(2) Ⅱ次.SK220



(1) Ⅱ次.1号竖穴住居跡



(2) Ⅱ次.K2



1



24



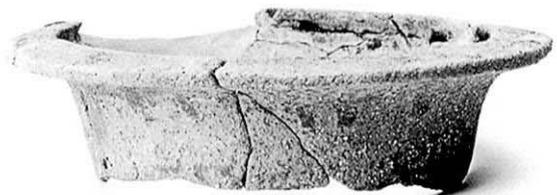
10



26



22



27



23



28



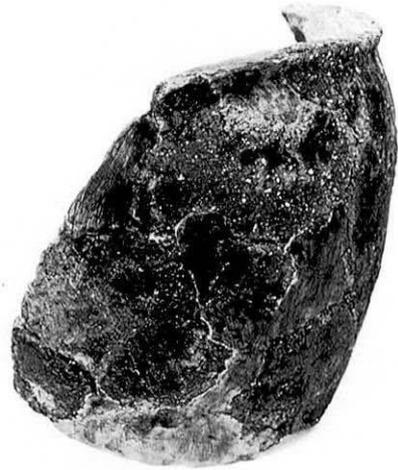
33



51



34



52



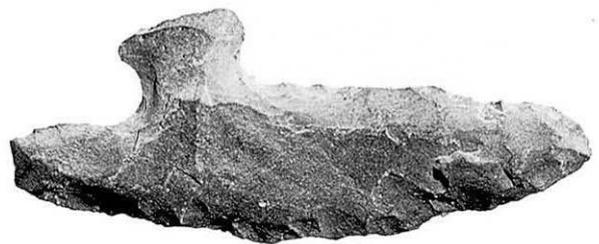
35



54



45



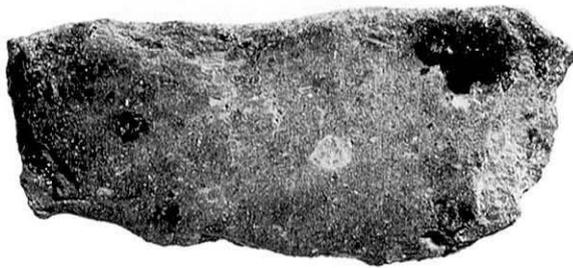
1



2



6



3



7



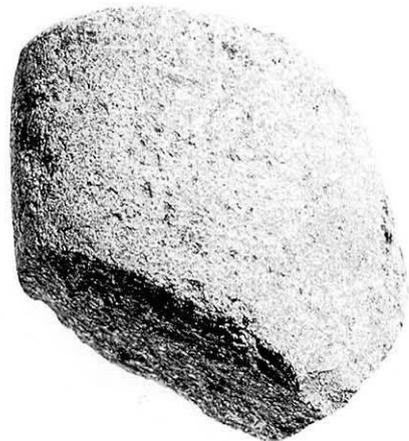
4



8



5



9



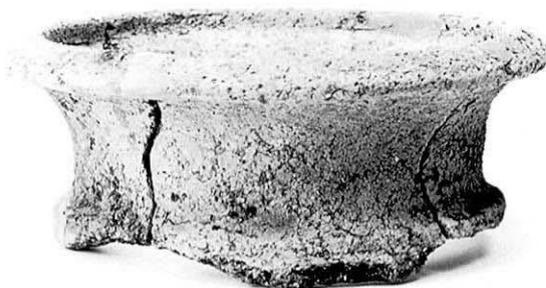
1



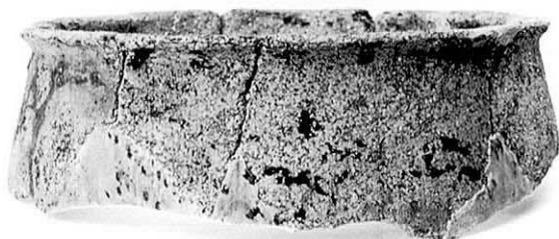
7



2



8



3



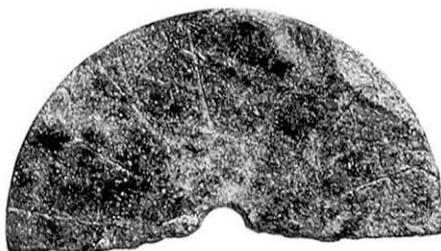
20



6



1



2



6



7



8

出土遺物⑤ (Ⅱ次)



I次  
56



I次  
57



II次  
23

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ひけしまいせき							
書名	ヒケシマ遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編著者名	舟山 良一							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 TEL092-501-2211							
発行年月日	西暦 2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヒケシマ遺跡	福岡県 大野城市 御笠川			33°32'39"	130° 29'11"	1984.4. ∩ 1984.5. 1989.11.1 ∩ 1990.2.21	約600m <sup>2</sup>  約780m <sup>2</sup>	民間開発
所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ヒケシマ遺跡	集落 墓地	弥生 古墳	住居跡 土坑 溝 甕棺墓	弥生土器・須恵器 土師器・土製品 石器		弥生時代中期の 集落と甕棺墓が主体		

## 大野城市文化財調査報告書

第67集

平成17年3月31日

発行 大野城市教育委員会  
福岡県大野城市曙町2丁目 2-1

印刷 陽明印刷企業組合  
福岡県春日市春日公園1-3